

Oracle® Application Server 10g

Forms and Reports Services インストレーション・ガイド

10g (9.0.4) for Microsoft Windows

部品番号 : B13880-01

2004 年 6 月

ORACLE®

Oracle Application Server 10g Forms and Reports Services インストレーション・ガイド, 10g (9.0.4) for Microsoft Windows

部品番号 : B13880-01

原本名 : Oracle Application Server 10g Forms and Reports Services Installation Guide, 10g (9.0.4) for Microsoft Windows

原本部品番号 : B13642-01

原本著者 : Anjana Suparna Sriram

原本協力者 : Orlando Cordero, Ken Chu, Lypp-tek Khoo-Ellis, Rohit Marwaha, Rajesh Ramachandran, Navneet Singh, Ingrid Snedecor, Gour Kishore Saha, Robin Zimmermann

Copyright © 2003, 2004 Oracle Corporation. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致しません。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation, and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしました、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。その他の名称は、Oracle Corporation または各社が所有する商標または登録商標です。

目次

はじめに	vii
対象読者	viii
このガイドの構成	viii
関連ドキュメント	ix
表記規則	x

1 Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の紹介

1.1 このインストール・タイプの制限事項	1-2
1.2 このインストール・タイプで使用可能な機能	1-2
1.2.1 Oracle Application Server Forms Services	1-2
1.2.2 Oracle Application Server Reports Services	1-2
1.2.3 Oracle HTTP Server	1-3
1.2.4 Oracle Application Server Web Cache	1-3
1.2.5 Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J)	1-3
1.2.6 Oracle Enterprise Manager	1-3
1.2.7 Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN)	1-4
1.2.8 Distributed Configuration Management (DCM)	1-4

2 インストールの概要

3 インストールの新機能

3.1 ポート	3-2
3.1.1 デフォルトのポート番号の使用方法	3-2
3.1.2 Oracle HTTP Server のデフォルトのポート番号 (80 および 443)	3-3

3.1.3	カスタム・ポート番号	3-3
3.1.4	カスタム・ポート番号 (静的ポート機能) の使用方法	3-3
3.1.4.1	staticports.ini ファイルの形式	3-4
3.1.4.2	インストーラが、指定されたポートではなくデフォルトのポートを使用する原因となるエラーの状況	3-6
3.1.4.3	Oracle HTTP Server および OracleAS Web Cache のポート	3-7
3.1.4.4	例	3-9
3.2	デフォルトのポート番号	3-9
3.2.1	デフォルトのポート番号を割り当てる方法	3-10
3.2.2	デフォルトのポート番号	3-10
3.3	Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の各インスタンスごとに 1 人の ias_admin ユーザー	3-13
3.4	オフネットワーク・インストールのサポート	3-13
3.5	DHCP のサポート	3-13
3.6	インストール後の IP アドレスおよびホスト名変更のサポート	3-14
3.7	Windows 2000 は SP3 以降が必要	3-14
3.8	変更された用語	3-14
3.9	Configuration Assistant の機能強化	3-15
3.10	より厳しくなった前提条件チェック	3-15
3.11	インストール統計情報の生成のサポート	3-15
3.12	DVD からのインストール	3-15

4 以前のバージョンとの互換性

4.1	以前のバージョンとリリース 10g (9.0.4) の互換性	4-2
4.2	相互運用性の問題および対処方法	4-3
4.2.1	9.0.2/9.0.3 と 10g (9.0.4) の Oracle Enterprise Manager が同一ポート (ポート 1810) を 使用する場合	4-4
4.2.2	10g (9.0.4) インスタンスの dcmtctl getState コマンドを 9.0.2 または 9.0.3 の インスタンスで使用できない場合	4-5
4.2.3	Oracle Enterprise Manager: 9.0.2 Middle-Tier へのロールアップ・メトリックが ない場合	4-5

5 要件

5.1	システム要件	5-2
5.1.1	メモリー使用量を減らすためのヒント	5-5
5.2	Windows システム・ファイル (wsf.exe)	5-5
5.3	オペレーティング・システム・ユーザー	5-7

5.4	環境変数	5-8
5.4.1	環境変数の設定方法	5-8
5.4.2	ORACLE_HOME と ORACLE_SID	5-9
5.4.3	PATH と CLASSPATH	5-9
5.4.4	TEMP	5-9
5.5	ネットワーク関連のトピック	5-9
5.5.1	DHCP コンピュータへのインストール	5-10
5.5.2	マルチホーム・コンピュータへのインストール	5-11
5.5.3	複数の別名を持つコンピュータへのインストール	5-12
5.5.4	ネットワーク接続されていないコンピュータへのインストール	5-13
5.5.5	ループバック・アダプタのインストール	5-14
5.5.5.1	コンピュータにループバック・アダプタがインストールされているかどうかの確認	5-14
5.5.5.2	ループバック・アダプタのインストール - Windows NT	5-15
5.5.5.3	ループバック・アダプタのインストール - Windows 2000	5-19
5.5.5.4	ループバック・アダプタのインストール - Windows 2003/Windows XP	5-23
5.5.5.5	ループバック・アダプタの削除 - Windows NT	5-25
5.5.5.6	ループバック・アダプタの削除 - Windows 2000/Windows 2003/Windows XP	5-25
5.5.6	CD-ROM または DVD からハード・ドライブへのコピー、ハード・ドライブからのインストール	5-26
5.5.7	リモート CD-ROM または DVD ドライブからのインストール	5-28
5.5.8	リモート・コントロール・ソフトウェアを使用したリモート・コンピュータへのインストール	5-30
5.6	インストーラが実行する前提条件チェック	5-32

6 インストールを始める前の基礎知識

6.1	Oracle ホーム・ディレクトリ	6-2
6.2	Oracle ホーム名	6-2
6.3	他の言語のインストール	6-2
6.4	Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services のインスタンスとインスタンス名	6-3
6.5	ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限	6-4
6.6	インストーラが使用するファイルの保存先	6-5
6.7	Oracle Universal Installer の起動	6-5

7 インストール後の作業

7.1	インストール後の Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services のインスタンスの状態	7-2
7.2	Forms/Reports Services のインストールのテスト	7-2
7.3	バックアップとリカバリ	7-3
7.4	SSL	7-3
7.5	NLS_LANG 環境変数	7-3
7.6	Forms および Reports アプリケーションの配置	7-3

A トラブルシューティング

A.1	要件の確認	A-2
A.2	インストール時にエラーが発生した場合の対処方法	A-2
A.3	Configuration Assistant のトラブルシューティング	A-3
A.3.1	Configuration Assistant のエラー	A-3
A.3.2	コンポーネントの構成と起動時のエラー	A-4
A.3.3	致命的エラー	A-5
A.3.4	OC4J Instance Configuration Assistant のエラー	A-6
A.4	Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の Configuration Assistant の説明	A-6

B インストールの削除と再インストール

B.1	10g (9.0.4) インスタンスの削除	B-2
B.2	すべての Oracle 製品の手動による削除	B-2
B.3	再インストール	B-5

C コンポーネントの URL

D Java Access Bridge のインストール

D.1	概要	D-2
D.2	JRE 1.4.2 のセットアップ	D-2
D.3	Oracle コンポーネントのセットアップ	D-2
D.3.1	Java Access Bridge のインストール	D-3
D.3.2	Java Access Bridge を使用するための Oracle コンポーネントの構成	D-4
D.3.2.1	Windows NT の構成	D-4

D.3.2.2 Windows 2000、Windows XP、Windows Server 2003 の構成 D-4

索引

はじめに

『Oracle Application Server 10g Forms and Reports Services インストレーション・ガイド』では、システム要件、インストーラの新機能、インストールの概念、他の製品との互換性、インストール後の作業およびトラブルシューティングのヒントについて説明します。

対象読者

このガイドは、システム管理作業に精通したユーザーを対象としています。このシステム管理作業には、ユーザーとグループの作成、グループへのユーザーの追加、また Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services (Forms/Reports Services) のインストール先であるコンピュータへのオペレーティング・システム・パッチの適用などが含まれます。一部のスクリプトを実行するには、Forms/Reports Services をインストールするユーザーに対してルート・アクセス権が付与されている必要があります。

このガイドの構成

このガイドは、次の章で構成されています。

第 1 章 「Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の紹介」

この章には、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の紹介とコンポーネントの概要があります。

第 2 章 「インストールの概要」

この章には、インストール手順の概要があります。

第 3 章 「インストールの新機能」

この章では、インストール手順に関する Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の新機能について説明します。

第 4 章 「以前のバージョンとの互換性」

この章では、他の製品をインストール済のコンピュータに Forms/Reports Services をインストールして実行する際に発生することがある互換性の問題について説明します。

第 5 章 「要件」

この章では、Forms/Reports Services をインストールして実行する際の要件を示します。

第 6 章 「インストールを始める前の基礎知識」

この章では、インストールを実行する前に精通しておく必要がある重要な概念およびその他的情報について説明します。個々のコンポーネントの連携方法について理解すると、インストールにおける重要な決定を容易に下せるようになります。

第 7 章 「インストール後の作業」

この章では、Forms/Reports Services が正常にインストールされるためにインストール後に実行する必要がある作業について説明します。

付録 A 「トラブルシューティング」

この付録には、インストール中に発生することがある問題に対するトラブルシューティング情報が記載されています。また、インストーラで実行される Configuration Assistant についての記述もあります。

付録 B 「インストールの削除と再インストール」

この付録では、ご使用のコンピュータからの Forms/Reports Services の削除方法および再インストール方法について説明します。

付録 C 「コンポーネントの URL」

この付録には、インストールしたコンポーネントにアクセスするための URL が記載されています。

付録 D 「Java Access Bridge のインストール」

この付録では、Java Access Bridge のインストール方法について説明します。Java Access Bridge を使用すると、ユーザー補助機能が Windows プラットフォームで実行中の Java ベース・インターフェース（インストーラなど）を読み取れるようになります。

関連ドキュメント

詳細は、次の Oracle ドキュメントを参照してください。

- Oracle Application Server 10g Forms and Reports Services のリリース・ノート
- 『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』
- 『Oracle Reports レポート作成ガイド』
- OTN (Oracle Technology Network) の Web サイト (<http://otn.oracle.com/products/reports/>) にある Getting Started with Oracle Reports

「Getting Started with Oracle Reports」の「Index」ページには、様々なタイプのドキュメントが提供されています。「Topic」および「Collateral Type」リストからオンライン・ヘルプと技術ノートを含め、Reports 関連のドキュメントをすべて選択できます。

- Oracle Forms Forms 6i からの Forms アプリケーションの移行
- 『Oracle Application Server Forms Services 利用ガイド 10g (9.0.4) for Windows and UNIX』

表記規則

このガイドでは、次の表記規則が使用されています。

規則	意味
固定幅フォントの小文字	固定幅フォントの小文字は、ファイル名、コマンドまたは構成ファイルの内容を示します。
固定幅フォントの小文字のイタリック	固定幅フォントの小文字のイタリックは、プレースホルダを示します。
[]	大カッコは、カッコ内の項目を任意に選択することを表します。
...	水平の省略記号は、直接関連しないコードの一部が省略されていることを示します。

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の紹介

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services を使用することで、
Oracle Application Server 10g (9.0.4) をすべてインストールし構成しなくても、
Forms/Reports Services のみをインストールして構成できるようになります。

このインストール・タイプは、Forms アプリケーションを Grid 環境へ 2 段階に分けてアップグレードする場合に最適です。第 1 段階では、クライアント・ベースまたはサーバー・ベースの Forms アプリケーションを Web ベースのアプリケーションにアップグレードすることで、Grid 環境に移行します。第 2 段階では、既存の Oracle Application Server インフラストラクチャ・インストールが提供するサービスを使用するかどうかを選択します。

1.1 このインストール・タイプの制限事項

Forms/Reports Services では、Single Sign-On、Identity Management 統合などのインフラストラクチャ・サービスは用意されていません。ただし、インフラストラクチャ・サービスは、Business Intelligence and Forms インストール・タイプで使用することができます。

また、後からこのインストールをインフラストラクチャに関連付けたり、リンクすることはできません。

インフラストラクチャの機能を利用するには、Business Intelligence and Forms を含む Oracle Application Server のインスタンスをインストールし、アプリケーションをこの新しいインストールに移動する必要があります。

1.2 このインストール・タイプで使用可能な機能

Forms/Reports Services をインストールすると、次の機能にアクセスできるようになります。

- [Oracle Application Server Forms Services](#)
- [Oracle Application Server Reports Services](#)
- [Oracle HTTP Server](#)
- [Oracle Application Server Web Cache](#)
- [Oracle Application Server Containers for J2EE \(OC4J\)](#)
- [Oracle Enterprise Manager](#)
- [Oracle Process Manager and Notification Server \(OPMN\)](#)
- [Distributed Configuration Management \(DCM\)](#)

1.2.1 Oracle Application Server Forms Services

Oracle Application Server Forms Services では、データベース・アクセス機能を備えた Forms アプリケーションを Web 環境内の Java クライアントに配布します。また、クラス・ダウンロード、ネットワーク通信量、および Oracle データベースとの対話を自動的に最適化します。Forms アプリケーションは、複数のサーバー間で自動的に負荷分散されるため、要求の数に応じて簡単にサービスを拡張することができます。

1.2.2 Oracle Application Server Reports Services

Oracle Application Server Reports Services では、高品質なデータベース・パブリッシングおよびレポート向けの、使いやすく、スケーラブルで、管理が容易なソリューションが用意されています。これにより、レポートを実行するための複数層のアーキテクチャを実装できます。

1.2.3 Oracle HTTP Server

Apache Web Server テクノロジに基づいている Oracle HTTP Server は、Oracle Application Server が使用する Web サーバーです。これにより、スケーラビリティ、安定性、スピード、および拡張性が実現されます。また、Java サーブレット、JavaServer Pages (JSP)、Perl、PL/SQL および CGI アプリケーションをサポートしています。

1.2.4 Oracle Application Server Web Cache

Oracle Application Server Web Cache は、Oracle プラットフォームで稼動する、頻繁に使用される Oracle E-Business Web サイトのパフォーマンス、スケーラビリティ、および可用性を向上させるサーバー・アクセラレータ・キャッシング・サービスです。Oracle Application Server Web Cache では、頻繁に使用される URL を仮想メモリーに保存することで、Web サーバー上にあるこれらの URL に対するリクエストを繰り返し処理する必要をなくします。また、1 つ以上のアプリケーションの Web サーバーから静的および動的に生成された HTTP コンテンツをキャッシングします。

1.2.5 Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J)

Oracle Application Server Containers for J2EE は、標準の Java Development Kit (JDK) で実行される Java すべて記述された、完全な J2EE コンテナ・セットです。

1.2.6 Oracle Enterprise Manager

Oracle Enterprise Manager Application Server Control (これ以降、Application Server Control と呼びます) では、複数の Oracle Application Server インスタンスとそのコンポーネントの監視、管理、および構成に必要な Web ベースの管理ツールが用意されています。デフォルトでは、Application Server Control は Oracle Application Server の各インスタンスとともにインストールされます。アプリケーションのデプロイ、セキュリティの管理、および Oracle Application Server クラスタの作成と管理を行えます。

Application Server Control は、次のもので構成されています。

- Oracle Application Server およびそのコンポーネントの管理に使用する Enterprise Manager ホーム・ページ。これらの Web ページでは、Oracle Application Server 環境の上位レベルのビューが提供されます。これらのページから、管理、構成、およびパフォーマンス監視に関する様々な詳細情報を掘り下げることができます。また、これらのページを使用して、アプリケーション・サーバーとそのコンポーネント、およびデプロイされたアプリケーションを管理できます。
- アプリケーション・サーバー・インスタンスおよびコンポーネントを追跡する基本的なソフトウェア・テクノロジ。これらのテクノロジは、必要な管理タスクを自動的に実行します。たとえば、各アプリケーション・サーバー・インスタンスのコンポーネントの検出、パフォーマンス・データの収集および加工、アプリケーション構成情報へのアクセスを可能にします。

1.2.7 Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN)

OPMN では、アプリケーション・サーバー・インスタンスおよびそのコンポーネント向けのプロセス制御および監視サービスが提供されます。コンポーネントのステータス情報を収集し、関連コンポーネントにその情報を配布します。Application Server Control では、アプリケーション・サーバー・インスタンスの起動や停止などのタスクに OPMN が使用されます。

1.2.8 Distributed Configuration Management (DCM)

DCM では、共通の Metadata Repository に関連付けられている Oracle Application Server インスタンス間の構成を管理します。これにより、Oracle Application Server のクラスタ規模での配置が可能になるため、アプリケーションを有するインスタンスにデプロイし、それをクラスタ全体に自動的に伝播させることができます。また、あるインスタンスで単一のホストまたはインスタンスの構成変更を行い、それをクラスタ内のすべてのインスタンスに伝播させることもできます。Application Server Control では、DCM を使用して構成を変更し、構成変更およびデプロイされたアプリケーションをクラスタ全体に伝播します。

2

インストールの概要

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services は、Oracle Application Server 10g (9.0.4) のインストール・オプションです。正常にインストールし、このリリースの機能を最適化するには、このガイド全体をお読みになることを強くお薦めします。

このインストールには、いくつかの制限事項があります。詳細は、[第 1.1 項「このインストール・タイプの制限事項」](#) を参照してください。

Forms/Reports Services をインストールする手順は次のとおりです。

1. 次のリリース・ノートの最新版に目を通してください。
 - Oracle Application Server 10g Forms and Reports Services のリリース・ノートには、OracleAS Forms Services、Oracle Forms Developer、OracleAS Reports Services、および Oracle Reports Developer のリリース・ノートが含まれています。さらに、Oracle Application Server 10g Forms and Reports Services のリリース・ノートには、このインストール・タイプで使用可能な機能についての情報があります。
 - Oracle Application Server 10g のリリース・ノートには、Oracle Application Server 10g (9.0.4) に関する一般情報だけでなく、その他の情報へのリファレンスも含まれています。最新のリリース・ノートは、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) (<http://otn.oracle.co.jp/document/products/as10g/index.html>) にあります。
2. Oracle Universal Installer (OUI) を起動します。「ようこそ」画面が表示されます。
3. 「ようこそ」画面で、「次へ」をクリックします。
4. 「ファイルの場所の指定」画面で、次の情報を入力します。
 - **名前** : この Oracle ホームを識別するための名前。この名前にスペースを含めることはできません。長さは最大 16 文字です。
例 : orawinfrs

-
- パス：インストール・ディレクトリ（Oracle ホーム）へのフルパス。指定したディレクトリが存在しない場合は、インストーラが管理者権限を使用して作成します。

例 : `c:\$oracle\$orawinfrs`

5. 「次へ」をクリックします。
6. 「使用可能な製品コンポーネント」画面が表示されます。この画面には、Forms/Reports Services の一部としてインストールできるコンポーネントが一覧表示されます。
7. また、他の言語をインストールする必要がある場合は、「使用可能な製品コンポーネント」画面で「製品の言語」をクリックします。
 - 「言語の選択」画面が表示されます。
 - 使用可能な言語の一覧から必要な言語を選択します。
 - 「OK」をクリックして、「使用可能な製品コンポーネント」画面に戻ります。

注意： デフォルトでは、Forms/Reports Services は、英語とオペレーティング・システムの言語のテキストでインストールされます。

8. 「次へ」をクリックします。
9. 「インスタンス名と ias_admin パスワードの指定」画面が表示されます。
 - インスタンス名：このインスタンスの名前を入力します。インスタンス名に使用できるのは、英数字およびアンダースコアのみです。コンピュータ上に複数の Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。
 - **ias_admin パスワードとパスワードの確認**：ias_admin ユーザーのパスワードを入力します。これは、インスタンスの管理ユーザーです。デフォルトでは、パスワードは、最低 5 文字の英数字で、少なくとも 1 文字が数字である必要があります。

注意： インストールを実行しているユーザーに関係なく、Forms/Reports Services の各インスタンスには独自のパスワードがあります。同じユーザーが複数のインスタンスをインストールしたときでも、パスワードがインスタンス間で共有されることはありません。

10. 「次へ」をクリックします。
11. 「送信メール・サーバー情報の指定」画面が表示されます。Oracle Application Server Reports Services が使用する送信メール（SMTP）サーバーを入力します。

注意： このフィールドは省略可能です。ただし、メール・サーバー情報を構成しなければ、電子メールでのレポート配布を行うことはできません。送信メール・サーバー情報を指定する方法の詳細は、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』を参照してください。

12. 「次へ」をクリックします。
13. 「サマリー」画面が表示されます。このウィンドウには、インストールされるすべてのコンポーネントが一覧表示されます。
14. 「インストール」をクリックして、インストールを完了します。「サマリー」画面にインストールの進捗状況が表示されます。

注意： インストールの途中で終了するには、「取消」をクリックします。

3

インストールの新機能

この章では、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services (Forms/Reports Services) の新しいインストール機能について説明します。この章は、次の項で構成されています。

- [第 3.1 項 「ポート」](#)
- [第 3.2 項 「デフォルトのポート番号」](#)
- [第 3.3 項 「Oracle Application Server 10g \(9.0.4\) Forms and Reports Services の各インスタンスごとに 1 人の ias_admin ユーザー」](#)
- [第 3.4 項 「オフネットワーク・インストールのサポート」](#)
- [第 3.5 項 「DHCP のサポート」](#)
- [第 3.6 項 「インストール後の IP アドレスおよびホスト名変更のサポート」](#)
- [第 3.7 項 「Windows 2000 は SP3 以降が必要」](#)
- [第 3.8 項 「変更された用語」](#)
- [第 3.9 項 「Configuration Assistant の機能強化」](#)
- [第 3.10 項 「より厳しくなった前提条件チェック」](#)
- [第 3.11 項 「インストール統計情報の生成のサポート」](#)
- [第 3.12 項 「DVD からのインストール」](#)

3.1 ポート

Oracle HTTP Server、OracleAS Web Cache、Oracle Enterprise Manager など、数多くの Forms/Reports Services コンポーネントではポートを使用します。インストーラでデフォルトのポート番号を割り当てたり、指定したポート番号を使用するよう構成することができます。次の項では、ポートの使用方法についてさらに詳しく説明します。

- [第 3.1.1 項「デフォルトのポート番号の使用方法」](#)
- [第 3.1.2 項「Oracle HTTP Server のデフォルトのポート番号（80 および 443）」](#)
- [第 3.1.3 項「カスタム・ポート番号」](#)
- [第 3.1.4 項「カスタム・ポート番号（静的ポート機能）の使用方法」](#)

3.1.1 デフォルトのポート番号の使用方法

コンポーネントでデフォルトのポート番号を使用する場合は、何も設定する必要はありません。デフォルトのポート番号とその範囲については、[第 3.2 項「デフォルトのポート番号」](#)を参照してください。

次の点に注意してください。

- インストーラがデフォルトのポートをコンポーネントに割り当てるのは、そのポートが他のアプリケーションによって使用されていない場合のみです。デフォルトのポートが使用中の場合、インストーラはそのコンポーネントのポート番号の範囲内にある他のポートを割り当てようとします。たとえば、中間層の Oracle HTTP Server のデフォルトの非 SSL ポート番号がポート 80 であるとします。このポートを別のアプリケーションが使用している場合、インストーラは 7777 ~ 7877 の範囲のポートを割り当てます。
- インストーラがポートが使用中かどうかを調べる際に、`services` ファイルのチェックは行われなくなりました。以前のリリースでは、ポート番号がそのファイルにリストされている場合、インストーラはそのポート番号を割り当てませんでした。
`services` ファイルは、`C:¥SystemRoot¥system32¥drivers¥etc` ディレクトリにあります。ここで、`SystemRoot` は、Windows NT および Windows 2000 の `winnt`、Windows XP および Windows 2003 の `windows` です。

3.1.2 Oracle HTTP Server のデフォルトのポート番号 (80 および 443)

Forms/Reports Services では、Oracle HTTP Server のデフォルトの非 SSL ポート番号は 80 で、SSL ポート番号は 443 です。これは、この製品の UNIX バージョンと異なっています。UNIX バージョンでは、デフォルトのポート番号として 7777 および 4443 が使用されています。

インストーラがデフォルトのポートをコンポーネントに割り当てるのは、そのポートが他のアプリケーションによって使用されていない場合のみです。ポートが使用中の場合、インストーラはそのコンポーネントのポート番号の範囲内にある他のポートを割り当てようします。たとえば、Oracle HTTP Server の場合、ポート 80 が使用中の場合、インストーラは [7777 - 7877](#) の範囲のポート番号を試します。デフォルトのポート番号の一覧については、[第 3.2.2 項「デフォルトのポート番号」](#) を参照してください。

3.1.3 カスタム・ポート番号

Forms/Reports Services では、Oracle Universal Installer (OUI) でデフォルトのポート番号を割り当てるのではなく、コンポーネントのカスタム・ポート番号を指定することができます。この機能は、静的ポートと呼ばれています。静的ポートを使用するには、コンポーネント名および指定するポート番号を記述したファイルを用意します。OUI は、デフォルトのポート番号のかわりに、このファイルの値を使用します。

関連項目： 詳細は、[第 3.1.4 項「カスタム・ポート番号（静的ポート機能）の使用方法」](#) を参照してください。

3.1.4 カスタム・ポート番号（静的ポート機能）の使用方法

コンポーネントに対してカスタム・ポート番号を割り当てるようインストーラに指示する手順は次のとおりです。

1. コンポーネント名およびポート番号を含むファイルを作成します。ファイルの形式は、[第 3.1.4.1 項「staticports.ini ファイルの形式」](#) で説明します。通常は、このファイルを staticports.ini ファイルと呼びますが、他の名前を付けることもできます。
2. インストーラを起動したら、コマンドラインで適切なパラメータと staticports.ini ファイルへのフルパスを指定します。

たとえば、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services をインストールする場合、次の構文を使用します（コマンドは改行せずに入力します）。

CD-ROM (ドライブ E: が CD-ROM ドライブであると想定します)。

```
E:> setup.exe
      oracle.iappserver.iapptop:s_staticPorts=C:\fullpath\to\local\
      staticports.ini
```

DVD-ROM (ドライブ E: が DVD-ROM ドライブであると想定します)。

```
E:> cd orawinfrs
E:>orawinfrs> setup.exe
      oracle.iappserver.iapptop:s_staticPorts=C:\fullpath\to\local\
      staticports.ini
```

staticports.ini ファイルへのフルパスは、必ず指定する必要があることに注意してください。インストーラが、起動時のディレクトリとは別のディレクトリに現行ディレクトリを変更するためです。ファイルへのフルパスを指定しないと、インストーラはファイルを見つけることができません。次にインストーラは、警告を表示せずにすべてのコンポーネントにデフォルトのポートを割り当てます。

3.1.4.1 staticports.ini ファイルの形式

staticports.ini ファイルの形式は次のとおりです (port_num はコンポーネントで使用するポート番号に置き換えます)。

```
Oracle HTTP Server port = port_num
Oracle HTTP Server Listen port = port_num
Oracle HTTP Server SSL port = port_num
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = port_num
Oracle HTTP Server Diagnostic port = port_num
Oracle HTTP Server Jserv port = port_num
Java Object Cache port = port_num
DCM Java Object Cache port = port_num
Oracle Notification Server Request port = port_num
Oracle Notification Server Local port = port_num
Oracle Notification Server Remote port = port_num
Application Server Control port = port_num
Application Server Control RMI port = port_num
Oracle Management Agent port = port_num
Web Cache HTTP Listen port = port_num
Web Cache HTTP Listen (SSL) port = port_num
Web Cache Administration port = port_num
Web Cache Invalidation port = port_num
Web Cache Statistics port = port_num
Reports Services SQL*Net port = port_num
Oracle Certificate Authority SSL Server Authentication port = port_num
Oracle Certificate Authority SSL Mutual Authentication port = port_num
Log Loader port = port_num
```

このファイルは、CD-ROM (ディスク 1) または DVD の staticports.ini ファイルをテンプレートとして使用すると簡単に作成できます。

1. CD-ROM または DVD の staticports.ini ファイルをハード・ディスクにコピーします。

表 3-1 CD-ROM および DVD の staticports.ini ファイルの場所

メディア	staticports.ini ファイルの場所
CD-ROM	ディスク 1: E:\stage\\$\Response\\$\staticports.ini
DVD	E:\\$\orawinfrs\\$\stage\\$\Response\\$\staticports.ini

2. ローカル・コピー（ハード・ディスク上のファイル）を編集して、使用するポート番号を含めます。

staticports.ini ファイルのすべてのコンポーネントのポート番号を指定する必要はありません。ファイルにコンポーネントがリストされていない場合は、インストーラはそのコンポーネントのデフォルトのポート番号を使用します。

次の例は、Application Server Control のポートと OracleAS Web Cache の一部のポートを設定します。指定されていないコンポーネントについては、インストーラはデフォルトのポート番号を割り当てます。

```
Application Server Control port = 2000
Web Cache Administration port = 2001
Web Cache Invalidation port = 2002
Web Cache Statistics port = 2003
```

インストールの完了後、%ORACLE_HOME%\install\\$\portlist.ini ファイルを調べることで割り当てられたポートを確認できます。

インストーラはメモリーを調べることで、ファイルで指定されたポートが使用可能かどうかを確認します。つまり、実行中のプロセスが使用しているポートしか検出できないということです。アプリケーションが使用しているポートを特定するために構成ファイルを調べることはありません。

指定されたポートが使用中であることを検出した場合、インストーラはアラートを表示します。使用中のポートは割り当てられません。この問題に対応する手順は次のとおりです。

1. staticports.ini ファイルを編集して、別のポートを指定するか、ポートを使用しているアプリケーションを停止します。
2. 「再試行」をクリックします。インストーラが staticports.ini ファイルを再度読み取り、ファイル内のエントリをもう一度確認します。

ヒント: staticports.ini ファイルは、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services のインストール後に作成された %ORACLE_HOME%\install\\$\portlist.ini ファイルと同じ形式です。 Forms/Reports Services がインストール済の場合、別のインストールで同じポート番号を使用するには、最初のインストールの portlist.ini ファイルを後続のインストールの staticports.ini ファイルとして使用することができます。

3.1.4.2 インストーラが、指定されたポートではなくデフォルトのポートを使用する原因となるエラーの状況

`staticports.ini` ファイルを注意深く調べます。間違いがあると、インストーラが警告を表示せずにデフォルトのポートを使用する原因となります。次の点を調べてください。

- 複数のコンポーネントに同じポートを指定した場合、インストーラは指定されたポートを最初のコンポーネントに使用し、他のコンポーネントにはそのコンポーネントのデフォルトのポートを使用します。複数のコンポーネントに同じポートを指定した場合でも、インストーラは警告を表示しません。
- `staticports.ini` ファイルに構文エラーがある場合（たとえば、行の `=` 記号を忘れた場合など）、インストーラはその行を無視します。このような行で指定されたコンポーネントについては、インストーラはデフォルトのポートを割り当てます。行に構文エラーがあっても、インストーラは警告を表示しません。
- コンポーネント名のつづりが間違っていた場合、インストーラはそのコンポーネントにデフォルトのポートを割り当てます。ファイル内のコンポーネント名では大文字と小文字が区別されます。認識できない名前が含まれている行に対して、インストーラは警告を表示しません。
- ポート番号に数字以外の値を指定した場合、インストーラはその行を無視し、コンポーネントにデフォルトのポート番号を割り当てます。その際、警告は表示されません。
- コマンドラインのパラメータのつづりが間違っていても、インストーラは警告を表示しません。そのまま処理を続行して、すべてのコンポーネントにデフォルトのポートを割り当てます。
- コマンドラインで `staticports.ini` ファイルへの相対パスを指定した場合（`.".¥staticports.ini"` や、単に `"staticports.ini"` とした場合）、インストーラはファイルを見つけることができません。インストーラは警告を表示せずに続行し、すべてのコンポーネントにデフォルトのポートを割り当てます。`staticports.ini` ファイルへのフルパスを指定する必要があります。
- コマンドラインで指定したパラメータが実行中のインストール・タイプと一致しない場合（インフラストラクチャのインストール時に中間層に対するパラメータを指定した場合など）、インストーラは警告を表示しません。そのまま処理を続行して、すべてのコンポーネントにデフォルトのポートを割り当てます。

3.1.4.3 Oracle HTTP Server および OracleAS Web Cache のポート

Oracle HTTP Server の `httpd.conf` ファイルでは、OracleAS Web Cache および Oracle HTTP Server で使用するポートは `Port` ディレクティブと `Listen` ディレクティブが指定します。これらのポートを設定するときには、構成するコンポーネントに応じて、`staticports.ini` ファイルの適切な行を選択します。

OracleAS Web Cache および Oracle HTTP Server を構成する場合

1. OracleAS Web Cache のポートを設定します。

OracleAS Web Cache では、`Port` ディレクティブで指定されているポートを使用します（図 3-1）。このポートを設定するには、`staticports.ini` ファイルの次の行を使用します。

```
Web Cache HTTP Listen port = port_number
```

OracleAS Web Cache の SSL ポートを構成するには、次の行を使用します。

```
Web Cache HTTP Listen (SSL) port = port_number
```

この場合、「Oracle HTTP Server port」行を使用してポート番号を設定することはできません。`staticports.ini` ファイルに「Oracle HTTP Server port」と「Web Cache HTTP Listen port」が両方とも存在する場合は、「Oracle HTTP Server port」行は無視されます。たとえば、次の行が `staticports.ini` に存在する場合、

```
Web Cache HTTP Listen port = 7979  
Oracle HTTP Server port = 8080
```

`Port` ディレクティブは 7979 に設定されます。

2. Oracle HTTP Server のポートを設定します。

Oracle HTTP Server では、`Listen` ディレクティブで指定されているポートを使用します。このポートを設定するには、`staticports.ini` ファイルの次の行を使用します。

```
Oracle HTTP Server Listen port = port_number
```

SSL Listen ポートを構成するには、次の行を使用します。

```
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = port_number
```

図 3-1 OracleAS Web Cache および Oracle HTTP Server の両方を構成する場合



Oracle HTTP Server のみを構成する場合 (OracleAS Web Cache は構成しない)

Oracle HTTP Server のみを構成する場合、Oracle HTTP Server では Port ディレクティブと Listen ディレクティブの両方を使用します (図 3-2)。この場合、両ディレクティブが同じポート番号を使用するように設定する必要があります。

これらのポートを設定するには、staticports.ini ファイルの「Oracle HTTP Server port」と「Oracle HTTP Server Listen port」行を使用します。次に例を示します。

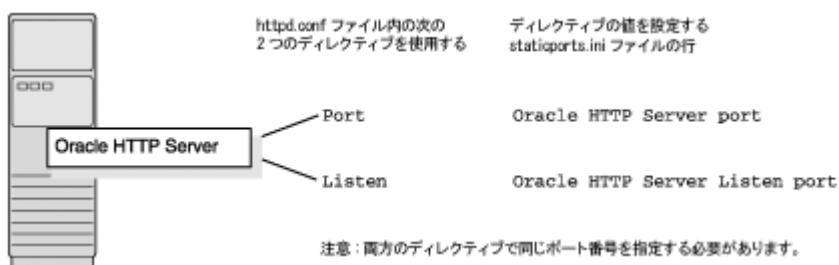
```
Oracle HTTP Server port = 8080
Oracle HTTP Server Listen port = 8080
```

これらのポートの SSL バージョンを設定するには、次の行を使用します。非 SSL バージョンの場合と同様、2 つの行で同じポート番号を指定する必要があります。

```
Oracle HTTP Server SSL port = 443
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = 443
```

staticports.ini の Web Cache 行も指定した場合、OracleAS Web Cache は構成していないため、これらの行は無視されます。

図 3-2 Oracle HTTP Server のみを構成する場合



3.1.4.4 例

この項では、staticports.ini を使用するためのいくつかの一般的な使用例について説明します。

- 第 3.1.4.4.1 項「フロントエンドに OracleAS Web Cache、ポート番号に 80 と 443 を使用するよう Oracle HTTP Server を構成する場合」
- 第 3.1.4.4.2 項「OracleAS Web Cache なしで、ポート番号に 80 と 443 を使用するよう Oracle HTTP Server を構成する場合」

3.1.4.4.1 フロントエンドに OracleAS Web Cache、ポート番号に 80 と 443 を使用するよう Oracle HTTP Server を構成する場合

この使用例では、次の行を含む staticports.ini ファイルを作成します。

```
Web Cache HTTP Listen port = 80
Oracle HTTP Server Listen port = 81
Web Cache HTTP Listen (SSL) port = 443
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = 444
```

Oracle HTTP Server では、Listen および SSL Listen のポートに任意の使用可能なポートを指定できます。この例では、ポート 81 と 444 を使用します。

3.1.4.4.2 OracleAS Web Cache なしで、ポート番号に 80 と 443 を使用するよう Oracle HTTP Server を構成する場合

この使用例では、次の行を含む staticports.ini ファイルを作成します。

```
Oracle HTTP Server port = 80
Oracle HTTP Server Listen port = 80
Oracle HTTP Server SSL port = 443
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = 443
```

3.2 デフォルトのポート番号

デフォルトでは、インストーラはデフォルトのポート番号のセットからコンポーネントにポート番号を割り当てます。別のポート番号のセットを使用する場合は、使用するポート番号をリストした staticports.ini という名前のファイルを作成する必要があります。詳細は、第 3.1.4 項「カスタム・ポート番号（静的ポート機能）の使用方法」を参照してください。

3.2.1 デフォルトのポート番号を割り当てる方法

インストーラは、次の方法を使用して、各コンポーネントにデフォルトのポート番号を割り当てます。

1. インストーラは、デフォルトのポート番号が使用中かどうかを調べます。使用中でない場合、コンポーネントにそのポート番号を割り当てます。
2. デフォルトのポート番号を Oracle 製品または他の稼動中のアプリケーションが使用している場合は、ポート番号の範囲内で一番小さい番号が割り当てられます。範囲内で使用可能な番号が見つかるまで、ポート番号が検索されます。

3.2.2 デフォルトのポート番号

表 3-2 に、コンポーネントのデフォルトのポート番号を示します。最後の「staticports.ini での名前」列は、staticports.ini ファイル内でのコンポーネント名を示しています。これにより、デフォルトのポート番号を上書きすることができます。詳細は、[第 3.1.4 項「カスタム・ポート番号（静的ポート機能）の使用方法](#) を参照してください。

表 3-2 デフォルトのポート番号とその範囲（コンポーネント別）

コンポーネント	デフォルトのポート	ポート番号の範囲	staticports.ini での名前
Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN)			
Oracle Notification Server Request Port	6003	6003 - 6099	Oracle Notification Server Request port
Oracle Notification Server Local Port	6100	6100 - 6199	Oracle Notification Server Local port
Oracle Notification Server Remote Port	6200	6200 - 6299	Oracle Notification Server Remote port
Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J)			
OC4J AJP	3301	3301 - 3400	設定不可能
OC4J RMI	3201	3201 - 3300	設定不可能
JMS	3701	3701 - 3800	設定不可能
IIOP	3401	3401 - 3500	設定不可能
IIOPS1	3501	3501 - 3600	設定不可能
IIOPS2	3601	3601 - 3700	設定不可能

表 3-2 デフォルトのポート番号とその範囲（コンポーネント別）（続き）

コンポーネント	デフォルトのポート	ポート番号の範囲	staticports.ini での名前
OracleAS Forms Services			
Oracle Application Server Forms Services	--	--	Oracle HTTP Server と同じポートを使用。
Oracle HTTP Server			
Oracle HTTP Server Listener (OracleAS Web Cache は構成しない)	80	7777 - 7877	Oracle HTTP Server Listen port
Oracle HTTP Server Listener (SSL) (OracleAS Web Cache は構成する)	443	4443 - 4543	Oracle HTTP Server Listen (SSL) port
Oracle HTTP Server Listener (非 SSL、OracleAS Web Cache は構成する)	80	7777 - 7877	Oracle HTTP Server port
Oracle HTTP Server Listener (SSL、OracleAS Web Cache は構成する)	443	4443 - 4543	Oracle HTTP Server SSL port
JServ サーブレット・エンジン	8007	8007 - 8107	Oracle HTTP Server Jserv port
Java Object Cache	7000	7000 - 7099	Java Object Cache port
DCM Java Object Cache	7100	7100 - 7199	DCM Java Object Cache port
SOAP Server	9998	9998 - 9999	設定不可能
ポート・トネーリング	7501	7501 - 7599	設定不可能
Oracle HTTP Server 診断ポート	7200	7200 - 7299	Oracle HTTP Server Diagnostic port
OracleAS Reports Services			
SQL*Net (6i の下位互換性の目的で維持)	1950	1950 - 1960	Reports Services SQL*Net port
Oracle Application Server Reports Services Visigenics CORBA	14000	14000 - 14010	設定不可能
OracleAS Web Cache			
OracleAS Web Cache - HTTP Listener	80	7777 - 7877	Web Cache HTTP Listen port
OracleAS Web Cache - HTTP Listener (SSL)	443	4443 - 4543	Web Cache HTTP Listen (SSL) port
OracleAS Web Cache 管理	4000	4000 - 4300	Web Cache Administration port

表 3-2 デフォルトのポート番号とその範囲（コンポーネント別）（続き）

コンポーネント	デフォルトのポート	ポート番号の範囲	staticports.ini での名前
OracleAS Web Cache の無効化	4001	4000 - 4300	Web Cache Invalidation port
OracleAS Web Cache の統計	4002	4000 - 4300	Web Cache Statistics port
Oracle Enterprise Manager Application Server Control			
Application Server Control	1810	1810 - 1829	Application Server Control port
Application Server Control - RMI	1850	1850 - 1869	Application Server Control RMI port
Application Server Control - SSL	1810	1810 - 1829	このポート番号は、インストール後に Application Server Control を SSL 用に構成したときに割り当てられます。詳細は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。
ログ・ローダー	44000	44000 - 44099	Log Loader port
OracleAS Certificate Authority			
サーバー認証の仮想ホスト	4400	4400 - 4419	Oracle Certificate Authority SSL Server Authentication port
相互認証の仮想ホスト	4401	4400 - 4419	Oracle Certificate Authority SSL Mutual Authentication port

3.3 Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の各インスタンスごとに1人のias_admin ユーザー

10g (9.0.4) では、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の各インスタンスにそれぞれのias_admin ユーザーがいます。同じオペレーティング・システム・ユーザーとして複数のForms/Reports Services のインスタンスを同じコンピュータ上にインストールした場合でも、ias_admin ユーザーごとに新しいパスワードを入力する必要があります。

3.4 オフネットワーク・インストールのサポート

オフネットワーク・インストールとは、ネットワークに接続されていないコンピュータにForms/Reports Services をインストールすることです。インストール後、コンピュータをネットワークに接続し、Forms/Reports Services の構成をいくつか変更して、実行およびリクエスト処理を行えるようにします。

オフネットワーク・インストールは次のプラットフォームでサポートされています。

- Linux
- Microsoft Windows

Solaris では、サポートされていません。ただし、Solaris マシンのほとんどはネットワーク化されているため、問題は起きません。

3.5 DHCP のサポート

Forms/Reports Services は、次のプラットフォームで DHCP を使用するコンピュータでサポートされています。

- Linux
- Microsoft Windows

Forms/Reports Services は、DHCP を使用する Solaris ではサポートされていません。

3.6 インストール後の IP アドレスおよびホスト名変更のサポート

Forms/Reports Services では、OracleAS Developer Kits 10g インストール・タイプを除くすべてのインストール・タイプについて、インストール後の IP アドレスの変更をサポートしています。

ホスト名の変更については、OracleAS Middle-Tier を実行するコンピュータに対してのみサポートされています。OracleAS Infrastructure 10g または OracleAS Developer Kits 10g を実行するコンピュータについては、ホスト名の変更はサポートされていません。

オペレーティング・システム・コマンドまたはオペレーティング・システム構成ファイルを編集することで、インストール後にホスト名または IP アドレスを変更した場合は、Application Server Control を使用して Forms/Reports Services 構成ファイルの情報を更新する必要があります。詳細は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。

3.7 Windows 2000 は SP3 以降が必要

リリース 2 (9.0.2) とリリース 2 (9.0.3) は、Service Pack 1 または 2 を適用した Windows 2000 にインストールできます。

10g (9.0.4) で Windows 2000 を実行している場合は、Service Pack 3 以降が必要です。Service Pack 2 では不十分です。

3.8 変更された用語

表 3-3 に、10g (9.0.4) で更新された用語を示します。10g (9.0.4) のドキュメント・セットでは、これらの新しい用語が使用されます。

表 3-3 更新された用語

リリース 2 (9.0.2) での用語	10g (9.0.4) での用語
Oracle Enterprise Manager Web サイト	Oracle Enterprise Manager Application Server Control または短縮形の Application Server Control
Oracle Management Server	Oracle Management Service

3.9 Configuration Assistant の機能強化

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services では、Configuration Assistant に次の機能が追加されています。

- ログ・ファイルが一元的に管理できる 1 つの場所に書き込まれます。
- ログ・ファイルのエラー・メッセージは、以前よりも簡単でわかりやすくなっています。
- Configuration Assistant が失敗しても再実行することができます。

詳細は、[付録 A 「トラブルシューティング」](#) を参照してください。

3.10 より厳しくなった前提条件チェック

10g (9.0.4) では、コンピュータが最低要件を満たしていることを確認するため、インストーラはより厳しい前提条件チェックを実行します。チェック・リストについては、[第 5.6 項「インストーラが実行する前提条件チェック」](#) を参照してください。

3.11 インストール統計情報の生成のサポート

インストーラでは、インストールに使用されるリソースを監視するためのコマンドライン・オプションが提供されるようになりました。次のオプションがサポートされています。

- `-printtime` は、インストールに要した時間を出力します。
- `-printmemory` は、インストールに使用したメモリー容量を出力します。
- `-printdiskusage` は、インストールに使用したディスク領域を出力します。

例：次のコマンドは、これら 3 つの項目に関する情報を出力します。

```
setup.exe -printtime -printmemory -printdiskusage
```

3.12 DVD からのインストール

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services は、DVD-ROM ディスクからインストールできるようになりました。インストールは、CD-ROM からも引き続き行うことができます。DVD からインストールするメリットは、CD-ROM のようにインストール中にディスクを交換する必要がないことにあります。

4

以前のバージョンとの互換性

この章では、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services で様々なバージョンの Oracle Forms および Oracle Reports を含む構成における互換性マトリックス、また注意が必要な既知の問題と対処方法について説明します。この章は、次の項で構成されています。

- [第 4.1 項 「以前のバージョンとリリース 10g \(9.0.4\) の互換性」](#)
- [第 4.2 項 「相互運用性の問題および対処方法」](#)

4.1 以前のバージョンとリリース 10g (9.0.4) の互換性

表 4-1 に、以前のバージョンの Oracle Forms および Oracle Reports の互換性マトリックスを示します。

表についての説明は次のとおりです。

- 「クライアント」列は、Oracle Reports および Oracle Forms のクライアントすべてを表します。
- 「Reports/Forms Server」列は、Oracle Forms Server および Oracle Reports Server の異なるリリースを表します。
- 「下位互換性のサポート」列は、クライアントとサーバー間の下位互換性の有無を表します。

表 4-1 Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の互換性マトリックス

クライアント	Reports/Forms Server	下位互換性のサポート	コメント
Oracle Reports 6i Client	Oracle Application Server 10g (9.0.4) Reports Services	あり	10g に付属の rwproxy を使用。
■ rwcgi60 ■ rwcli60 ■ rwrqv60 ■ rw servlet			
Oracle9i (9.0.2) Reports Client	Oracle Application Server 10g (9.0.4) Reports Services	あり	なし
■ rwcgi ■ rwclient ■ rwrqv ■ rw servlet			
Oracle Reports 10g Client	Oracle 9iAS Reports Services リリース 2 (9.0.2)	あり	なし
■ rwcgi ■ rwclient ■ rwrqv ■ rw servlet			

表 4-1 Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の互換性マトリックス (続き)

クライアント	Reports/Forms Server	下位互換性のサポート	コメント
Oracle Reports 10g Client	Oracle Reports Server リリース 6i	なし	なし
■ rwcgi ■ rwclient ■ rwrqv ■ rw servlet			
Oracle Forms 6i Client	iAS リリース 1 (1.0.2.x) Forms Services	あり	なし
Oracle9i Forms Client	Oracle 9iAS Forms Services リリース 2 (9.0.2)	あり	なし
Oracle Forms 10g Client	Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms Services	あり	9.0.2 および 9.0.4 では、再コンパイルせずに同一のランタイム・ファイル (FMX、PLX、MMX など) を使用可能。たとえば、9.0.2 でコンパイルした FMX は 9.0.4 でも使用できる。

4.2 相互運用性の問題および対処方法

この項では、異なるバージョンのアプリケーション・サーバー・インスタンスを含む構成を使用する際に注意が必要な既知の問題と対処方法について説明します。

- [第 4.2.1 項「9.0.2/9.0.3 と 10g \(9.0.4\) の Oracle Enterprise Manager が同一ポート \(ポート 1810\) を使用する場合」](#)
- [第 4.2.2 項「10g \(9.0.4\) インスタンスの dcmctl getState コマンドを 9.0.2 または 9.0.3 のインスタンスで使用できない場合」](#)
- [第 4.2.3 項「Oracle Enterprise Manager: 9.0.2 Middle-Tier へのロールアップ・メトリックがない場合」](#)

4.2.1 9.0.2/9.0.3 と 10g (9.0.4) の Oracle Enterprise Manager が同一ポート (ポート 1810) を使用する場合

9.0.2 および 9.0.3 では、ポートがすでに使用中かどうかに関係なく、インストーラがポート 1810 を Oracle Enterprise Manager Web サイトに割り当てます。9.0.2 または 9.0.3 インスタンスをインストールする予定のコンピュータに 10g (9.0.4) インスタンスがすでに存在する場合、10g (9.0.4) インスタンスの Oracle Enterprise Manager Application Server Control コンポーネントで、ポート 1810 が使用されている可能性があります。

ヒント： 10g (9.0.4) では、各コンポーネント用にカスタム・ポート番号を指定することができます。第 3.1.4 項「[カスタム・ポート番号 \(静的ポート機能\) の使用方法](#)」を参照してください。

9.0.2/9.0.3 と 10g (9.0.4) の Oracle Enterprise Manager が同一ポート (1810) で構成されている場合、10g (9.0.4) の Oracle Enterprise Manager が使用するポートを別のポートに変更することができます。変更後は、両方の Oracle Enterprise Manager を同時に実行できます。10g (9.0.4) の Oracle Enterprise Manager のポートを変更する手順は次のとおりです。

1. 10g (9.0.4) のホームで、%ORACLE_HOME%\sysman\j2ee\config\emd-web-site.xml ファイルを編集し、ポートの値を 1810 から未使用のポートに変更します。次の例では、ポートを 1814 に設定しています。

```
<web-site host=" [ALL] " port="1814" display-name="Oracle Enterprise Manager iAS Console Website" secure="false">
```

9.0.2 または 9.0.3 のインスタンスが 1810 を使用している場合は、そのインスタンスが RMI 操作にポート 1811 を使用している可能性もあります。9.0.2 または 9.0.3 の Oracle Enterprise Manager を実行した状態で、1810 ~ 1829 の範囲でどのポートが未使用であるかをチェックし、この値を使用します。

使用中のポートを調べるには、netstat コマンドを実行できます。次の例では、ポート 1814 が使用中かどうかをチェックします。

```
prompt> netstat -n | grep 1814
```

2. 10g (9.0.4) のホームで、%ORACLE_HOME%\sysman\emd\targets.xml ファイルに同じポート番号を入力します。ポート番号は、oracle_ias ターゲットの StandaloneConsoleURL プロパティで指定されています。

```
<Target TYPE="oracle_ias" NAME="infra.myhost.oracle.com" VERSION="1.0">
  ...
  <Property NAME="StandaloneConsoleURL"
    VALUE="http://myhost.oracle.com:1814/emd/console"/>
```

これら 2 つのファイルを更新すると、9.0.2/9.0.3 と 10g (9.0.4) の Oracle Enterprise Manager を両方同時に実行できます。

4.2.2 10g (9.0.4) インスタンスの `dcmctl getState` コマンドを 9.0.2 または 9.0.3 のインスタンスで使用できない場合

10g (9.0.4) インスタンスから `dcmctl getState` コマンドを実行して 9.0.2 または 9.0.3 インスタンスの情報を取得しようとすると、次の ADMN-604104 エラーが表示されます。

```
prompt> dcmctl getState -i name_of_902_or_903_instance
ADMN-604104 Unable to connect to the OPMN process to obtain process status table
```

`dcmctl` コマンドを使用して 9.0.2 または 9.0.3 インスタンスの情報を取得するには、9.0.2 または 9.0.3 の `dcmctl` コマンドを使用します。

4.2.3 Oracle Enterprise Manager: 9.0.2 Middle-Tier へのロールアップ・メトリックがない場合

Oracle Enterprise Manager Application Server Control 10g (9.0.4) では、9.0.2.x または 9.0.3.x のインスタンスが監視されません。これらのインスタンスを管理するには、9.0.2 または 9.0.3 の Oracle Enterprise Manager を使用する必要があります。

5

要件

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services をインストールする前に、ご使用のコンピュータがこの章で示す要件を満たしているかどうかを確認する必要があります。

この章は、次の項で構成されています。

- [第 5.1 項「システム要件」](#)
- [第 5.2 項「Windows システム・ファイル \(wsf.exe\)」](#)
- [第 5.3 項「オペレーティング・システム・ユーザー」](#)
- [第 5.4 項「環境変数」](#)
- [第 5.5 項「ネットワーク関連のトピック」](#)
- [第 5.6 項「インストーラが実行する前提条件チェック」](#)

5.1 システム要件

表 5-1 に、Forms/Reports Services をインストールする際のシステム要件を示します。インストーラは、インストールの開始時にこれらの要件の多くをチェックして、満たされていない項目があれば警告を表示します。インストーラがチェックを行わない要件については、表 5-6 を参照してください。

インストーラのシステム・チェックは、インストールを行わなくても実行することができます。システム・チェックは、次に示すように、`setup.exe` コマンドで実行します。

`setup.exe` コマンドは、Forms/Reports Services CD-ROM (ディスク 1) または DVD (orawinfrs ディレクトリ内) にあります。

CD-ROM (ドライブ E: が CD-ROM ドライブであると想定します)。

```
E:¥> setup.exe -executeSysPrereqs
```

DVD (ドライブ E: が DVD-ROM ドライブであると想定します)。

```
E:¥> cd orawinfrs
```

```
E:¥orawinfrs> setup.exe -executeSysPrereqs
```

結果は画面上に表示されるだけでなく、ログ・ファイルにも書き込まれます。実行されるチェックの種類の詳細は、第 5.6 項「インストーラが実行する前提条件チェック」を参照してください。

表 5-1 システム要件

項目	要件	インストーラによるチェックの有無
オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Windows NT 4.0 (Service Pack 6a) ■ Microsoft Windows 2000 (Service Pack 3 以上) ■ Microsoft Windows Server 2003 (32 ビット) ■ Microsoft Windows XP は、次の 2 つのインストール・タイプでのみサポートされています。 <ul style="list-style-type: none"> OracleAS Infrastructure 10g なしの J2EE and Web Cache 中間層 - OracleAS Developer Kits 10g <p>Windows XP に Forms/Reports Services の他のインストール・タイプをインストールできますが (警告が表示されるが続行可能)、Windows XP ではサポートされていません。</p> <p>注意: Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services は、ターミナル・サービス機能がある Windows オペレーティング・システムでサポートされていません (たとえば、Windows NT Terminal Server Edition および Windows 2000 ターミナル サービスはサポートされていない)。</p>	あり

表 5-1 システム要件（続き）

項目	要件	インストーラによるチェックの有無
ネットワーク	Forms/Reports Services は、ネットワークに接続されているコンピュータまたはスタンドアロン・コンピュータ（ネットワークに接続されていない）にインストールできます。 Forms/Reports Services をスタンドアロン・コンピュータにインストールする場合は、インストール終了後にコンピュータをネットワークに接続できます。ネットワークに接続するときは、いくつかの構成作業を行う必要があります。詳細は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。	なし
IP	Forms/Reports Services は、静的 IP または DHCP ベースの IP を使用するコンピュータにインストールできます。	なし
プロセッサ	Intel Pentium 300 MHz プロセッサ	あり
メモリー	様々なインストール・タイプ別に示されたメモリー要件は、Forms/Reports Services をインストールして実行するために必要な物理メモリーを表します。しかし、本番サイトでは大抵、少なくとも 1 GB の物理メモリーを構成する必要があります。通信量が多いサイトについては、さらにメモリーを増やすことで、パフォーマンスが向上します。Java アプリケーションでは、OC4J プロセスに割り当てられる最大ヒープ・サイズを増やすか、別の OC4J プロセスがこのメモリーを利用するように構成する必要があります。詳細は、『Oracle Application Server 10g パフォーマンス・ガイド』を参照してください。 インストールに最適なメモリー量を決める最善の方法は、使用しているサイトの負荷テストを行うことです。リソース要件は、アプリケーションや使用パターンによってまったく異なる可能性があります。さらに、オペレーティング・システムのメモリー監視ユーティリティの中には、メモリー使用状況を誇張してしまうものもあります（共有メモリーの表示方法の違いが原因の一部と考えられる）。メモリー要件を決める際には、負荷テストで物理メモリーを追加してから、パフォーマンスの変化を監視することをお薦めします。テスト用にメモリーおよびプロセッサ・リソースを構成する方法については、プラットフォームごとのベンダー・ドキュメントを参照してください。 Forms/Reports Services: 1 GB メモリー要件を満たしていない場合は、インストーラが警告を表示します。すべてのコンポーネントではなく一部のみを構成する場合は、必要なメモリーは若干少なくても問題ないため、警告は無視して続行することができます。ただし、サイトをテストして、メモリーが十分であるかどうかを確認する必要があります。	あり
ディスク容量	800 MB	なし
TEMP ディレクトリの容量	55 MB	あり

表 5-1 システム要件（続き）

項目	要件	インストーラによるチェックの有無
合計ページファイル・サイズ（仮想メモリー）	1.5 GB 合計ページファイル・サイズ（仮想メモリー）を表示して変更する手順は次のとおりです。	あり
	Windows NT の場合	
	1. 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」を選択します。 2. 「システム」をダブルクリックします。 3. 「パフォーマンス」タブを選択します。 4. 「変更」をクリックして、仮想メモリーの設定を表示および変更します。	
	Windows 2000 の場合	
	1. 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「システム」を選択します。 2. 「詳細」タブを選択します。 3. 「パフォーマンス オプション」をクリックします。 4. 「変更」をクリックして、仮想メモリーの設定を確認および変更します。	
モニター	256 色	あり
サポートされているブラウザ	次のブラウザがサポートされています。 <ul style="list-style-type: none">■ Microsoft Internet Explorer 5.5、6.0 以上■ Netscape 4.78、4.79、7 以上■ Mozilla 1.3.1 以上 ただし、Oracle Enterprise Manager は次のブラウザ用に最適化されています。 <ul style="list-style-type: none">■ Microsoft Internet Explorer 5.5、6.0 以上■ Netscape 7 以上■ Mozilla 1.3.1 以上 Forms アプリケーションには、ブラウザ内で実行されている JVM が必要です。現時点では、次のブラウザがサポートされています。 <ul style="list-style-type: none">■ ネイティブ JVM または JInitiator 1.3.1.13 以上を搭載した Microsoft Internet Explorer 6.0 以上■ JInitiator 1.3.1.13 以上または Sun Java Plugin 1.4.1 以上を搭載した Netscape 4.7x または 7.0x 以上	なし

5.1.1 メモリー使用量を減らすためのヒント

メモリーの使用量を減らす必要がある場合は、次のことを行います。

- インストール後、メモリー使用量を減らすために使用していないサービスを停止するには、Oracle Enterprise Manager で停止します。詳細は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。
- Oracle Report Services では、環境変数 REPORTS_JVM_OPTIONS により小さい値を指定することで JVM のヒープ・サイズを制御できます。詳細は、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』を参照してください。

5.2 Windows システム・ファイル (wsf.exe)

注意： この手順は、Windows NT で実行している場合にのみ適用されます。

wsf.exe を実行して、最新の Windows システム・ファイルであることを確認します。インストーラを起動して Forms/Reports Services をインストールするときは、これらのファイルがチェックされます。これらが最新ファイルでないことがわかった場合は、インストーラを終了して wsf.exe を実行する必要があります。

wsf.exe は、Forms/Reports Services の CD-ROM (ディスク 1) または DVD に含まれています。

wsf.exe を実行する手順は次のとおりです。

1. 他のアプリケーションで開いているドキュメントや保存していないドキュメントがある場合は、保存して終了します。wsf.exe によって実行後にコンピュータが自動的に再起動されるため、この作業は重要です。
2. wsf.exe を実行すると、Oracle Universal Installer が起動され、Windows システム・ファイルがインストールされます。

CD-ROM	DVD
<ol style="list-style-type: none"> 1. ディスク 1 を CD-ROM ドライブに挿入します。 2. wsf.exe を実行します。次の例では、ドライブ E: が CD-ROM ドライブであると想定します。 E:> wsf.exe 	<ol style="list-style-type: none"> 1. Forms/Reports Services の DVD を DVD-ROM ドライブに挿入します。 2. wsf.exe を実行します。次の例では、ドライブ E: が DVD-ROM ドライブであると想定します。 E:> cd orawinfrs E:> orawinfrs> wsf.exe

3. コンピュータにインストールされている Oracle 製品が検出されなかった場合は、「ようこそ」画面と「ファイルの場所の指定」画面が表示されます。コンピュータにインストールされている Oracle 製品が検出された場合は、これらの画面は表示されません（ステップ 4 へ進みます）。
 - a. 「ようこそ」画面で、「次へ」をクリックします。
 - b. 「ファイルの場所の指定」画面で、次の情報を入力します。
名前: wsf の Oracle ホームの名前を入力します。
パス: フルパスで入力します。このフィールドに入力した値とは関係なく、ファイルは適切なシステム・ディレクトリにインストールされます。
「次へ」をクリックします。
4. システムの再起動が必要であることを示す警告画面で、「次へ」をクリックして Windows システム・ファイルをインストールします。
インストールが完了すると、必要に応じてコンピュータが再起動されます。インストールの完了画面は表示されません。

Windows システム・ファイルの再インストール

なんらかの理由で Windows システム・ファイルの再インストールが必要な場合（ファイルが破損した場合など）は、wsf.exe を -showFileLocationsScreen オプションを指定して起動する必要があります。このオプションを指定すると、「ようこそ」画面と「ファイルの場所の指定」画面が表示されるようになります。

このオプションを指定しない場合、インストーラは Windows システム・ファイルがすでにインストールされているものと判断するため、これらの画面が表示されず、ファイルの再インストールが実行されません。

Windows システム・ファイルを再インストールする手順は次のとおりです。

1. wsf.exe を -showFileLocationsScreen オプションを指定して起動します。

```
E:> wsf.exe -showFileLocationsScreen
```

2. 「ようこそ」画面で、「次へ」をクリックします。
3. 「ファイルの場所の指定」画面で、次の情報を入力します。

名前: wsf の Oracle ホームの名前を入力します。コンピュータ上の他の Oracle ホームとは別の名前を指定します。

パス: フルパスで入力します。このフィールドに入力した値とは関係なく、ファイルは適切なシステム・ディレクトリにインストールされます。

「次へ」をクリックします。

4. システムの再起動が必要であることを示す警告画面で、「次へ」をクリックして Windows システム・ファイルを再インストールします。
- インストールが完了すると、コンピュータが再起動されます。インストールの完了画面は表示されません。

5.3 オペレーティング・システム・ユーザー

インストールを実行するオペレーティング・システム・ユーザーは、Administrators グループのメンバーである必要があります。Administrators グループに属しているかどうかがわからない場合は、次の手順を実行して確認します。

表 5-2 ユーザーが Administrators グループに属しているかどうかの確認

Windows NT	Windows 2000/Windows 2003/Windows XP
<ol style="list-style-type: none"> 1. 「スタート」→「プログラム」→「管理ツール」→「ユーザー マネージャ」を選択します。「ユーザー マネージャ」ダイアログが表示されます。 2. ユーザーを選択します。 3. 「ユーザー」→「プロパティ」を選択します。「ユーザーのプロパティ」ダイアログが表示されます。 4. 「ユーザーのプロパティ」ダイアログで、「グループ」アイコンをクリックします。「グループ メンバシップ」ダイアログが表示されます。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「コンピュータの管理」ダイアログを表示します。 Windows 2000/Windows XP の場合デスクトップで「マイ コンピュータ」を右クリックし、「管理」を選択します。 2. 左側の「ローカル ユーザーとグループ」を開き、「ユーザー」を選択します。 3. 右側のユーザーを右クリックし、「プロパティ」を選択します。「プロパティ」ダイアログが表示されます。 4. 「プロパティ」ダイアログで、「所属するグループ」タブを選択します。

Administrators グループのメンバーでない場合は、このグループに追加するよう管理者に依頼するか、Administrators グループのメンバーであるユーザーとしてログインします。

5.4 環境変数

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services をインストールするオペレーティング・システム・ユーザーは、次の環境変数を設定（または解除）する必要があります。

表 5-3 に、環境変数を設定または解除する必要があるかどうかを示します。

表 5-3 環境変数の要約

環境変数	設定または解除
ORACLE_HOME と ORACLE_SID	どちらでもかまわない（インストーラによってこれら 2 つの環境変数は解除される）。
PATH と CLASSPATH	Oracle ホーム・ディレクトリ内にあるディレクトリの参照はできない。
TEMP	省略可能。解除された場合は、C:\temp がデフォルトになる。

5.4.1 環境変数の設定方法

この項では、Windows の環境変数の設定方法について説明します。

表 5-4 環境変数の設定方法

Windows NT	Windows 2000/Windows 2003/Windows XP
<ol style="list-style-type: none"> 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」を選択します。 「システム」アイコンをダブルクリックします。 「環境」タブを選択します。 変数の値を変更するには、変数を選択し、「値」フィールドで値を編集します。作業が終わったら、「設定」をクリックします。 	<ol style="list-style-type: none"> 「コントロールパネル」の「システム」を表示します。 Windows 2000 の場合「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「システム」を選択します。 Windows 2003 の場合「スタート」→「コントロールパネル」→「システム」を選択します。 Windows XP の場合「スタート」→「コントロールパネル」を選択し、「システム」をダブルクリックします。 「詳細」タブを選択します。 「環境変数」をクリックします。 変数の値を変更するには、変数を選択し、「編集」をクリックします。

5.4.2 ORACLE_HOME と ORACLE_SID

これらの環境変数はインストーラによって解除されるため、インストーラの起動時には設定または解除のどちらの状態でもかまいません。

5.4.3 PATH と CLASSPATH

PATH および CLASSPATH 環境変数で、Oracle ホーム・ディレクトリが参照されないように編集します。

5.4.4 TEMP

インストール時には、インストーラが一時ファイルを一時ディレクトリに書き込む必要があります。デフォルトでは、一時ディレクトリの場所は C:\temp です。

C:\temp 以外の場所を一時ディレクトリにするには、TEMP 環境変数に別のディレクトリへのフルパスを設定します。このディレクトリは、表 5-1 の要件を満たしている必要があります。

5.5 ネットワーク関連のトピック

通常、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services をインストールするコンピュータは、ネットワーク接続されており、Forms/Reports Services インストールを含むローカル記憶域、ディスプレイ画面、CD-ROM または DVD-ROM ドライブを備えています。

この項では、このような一般的な使用例に該当しないコンピュータへの Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services のインストール方法について説明します。この項は、次のトピックで構成されています。

- [第 5.5.1 項「DHCP コンピュータへのインストール」](#)
- [第 5.5.2 項「マルチホーム・コンピュータへのインストール」](#)
- [第 5.5.3 項「複数の別名を持つコンピュータへのインストール」](#)
- [第 5.5.4 項「ネットワーク接続されていないコンピュータへのインストール」](#)
- [第 5.5.5 項「ループバック・アダプタのインストール」](#)
- [第 5.5.6 項「CD-ROM または DVD からハード・ドライブへのコピー、ハード・ドライブからのインストール」](#)
- [第 5.5.7 項「リモート CD-ROM または DVD ドライブからのインストール」](#)
- [第 5.5.8 項「リモート・コントロール・ソフトウェアを使用したリモート・コンピュータへのインストール」](#)

5.5.1 DHCP コンピュータへのインストール

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services を DHCP コンピュータ上で実行する際は、この制限事項に注意してください。DHCP コンピュータ上の Forms/Reports Services インスタンスは、他のコンピュータで実行されているインスタンスと通信できません。互いに通信する必要があるインスタンスはすべて、同じコンピュータ上で実行する必要があります。クライアントに関する制限事項はありません。ネットワーク上の DHCP コンピュータを特定できる場合は、他のコンピュータのクライアントが DHCP コンピュータで実行されているインスタンスにアクセスできます。

Forms/Reports Services を DHCP コンピュータにインストールする前に、次の手順を実行します。

1. ループバック・アダプタを DHCP コンピュータにインストールします。

ループバック・アダプタをインストールすると、コンピュータにローカル IP が割り当てられます。インストールを行うと (DHCP のため) 毎回 IP アドレスが変わりますが、ループバック・アダプタをインストールして、ローカル IP アドレスを割り当てる、`chgiphost` スクリプトを実行する必要がなくなります。

プライマリ・ネットワーク・アダプタの指定

Windows では、ループバック・アダプタがネットワーク・アダプタの一種であると見なされます。ループバック・アダプタをコンピュータにインストールすると、コンピュータには少なくとも 2 種類のネットワーク・アダプタがあることになります。ネットワーク・アダプタとループバック・アダプタです。

Windows では、ループバック・アダプタをプライマリ・アダプタとして使用します。プライマリ・アダプタは、アダプタのインストール順序によって決まります。

- Windows NT では、最初にインストールされたアダプタがプライマリ・アダプタになります。つまり、ループバック・アダプタをインストールしてからネットワーク・アダプタを削除し、ネットワーク・アダプタを再インストールする必要があります。
- Windows 2000 では、最後にインストールされたアダプタがプライマリ・アダプタになります。この場合、ループバック・アダプタをインストールするだけで済みます。ただし、ループバック・アダプタのインストール後に他のネットワーク・アダプタをインストールした場合は、ループバック・アダプタを削除してから、再インストールする必要があります。

別の Windows プラットフォームにループバック・アダプタをインストールする方法について、[第 5.5.5 項「ループバック・アダプタのインストール」](#) を参照してください。

2. Forms/Reports Services をインストールする各コンピュータに対し、Ping を実行します。
- テスト対象のコンピュータ自体で Ping を実行します。その際には、ホスト名のみを指定した Ping と、完全修飾名を指定した Ping を実行してください。
- たとえば、`mycomputer` というコンピュータにループバック・アダプタをインストールした場合は、次のように指定します。

<code>prompt> ping mycomputer</code>	<i>Ping itself using just the hostname.</i>
<code>Reply from 10.10.10.10</code>	<i>Returns local IP.</i>
<code>prompt> ping mycomputer.mydomain.com</code>	<i>Ping using a fully qualified name.</i>
<code>Reply from 10.10.10.10</code>	<i>Returns local IP.</i>

注意： テスト対象のコンピュータ自体で Ping を実行すると、`ping` コマンドはローカル IP (ループバック・アダプタの IP) を返す必要があります。コンピュータのネットワーク IP は返されません。

- ネットワーク上の他のコンピュータから Ping を実行します。その際には、ホスト名のみを指定した Ping と、完全修飾名を指定した Ping を実行してください。
- この場合、`ping` コマンドは、コンピュータのネットワーク IP を返します。

<code>prompt> ping mycomputer</code>	<i>Ping using the hostname.</i>
<code>Reply from 139.185.140.166</code>	<i>Returns network IP.</i>
<code>prompt> ping mycomputer.mydomain.com</code>	<i>Ping using a fully qualified name.</i>
<code>Reply from 139.185.140.166</code>	<i>Returns network IP.</i>

`ping` が失敗した場合は、ネットワーク管理者に連絡してください。

5.5.2 マルチホーム・コンピュータへのインストール

マルチホーム・コンピュータは、複数の IP アドレスに関連付けられています。これは通常、コンピュータ上に複数のネットワーク・カードを持つことによって実現されます。各 IP アドレスはホスト名に関連付けられています。さらに、ホスト名の別名を設定することもできます。

マルチホーム・コンピュータ上に Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services をインストールする場合、インストーラが Forms/Reports Services でプライマリ・ネットワーク・アダプタのホスト名または IP アドレスを使用するように構成します。

このホスト名（またはこのホスト名の別名）を使用して、クライアントがコンピュータにアクセスできるようにする必要があります。そのことを確認するには、クライアント・コンピュータから短縮名（ホスト名のみ）およびフルネーム（ホスト名. ドメイン名）を使用してホスト名に対する Ping を実行します。これらは、両方とも正常に実行される必要があります。

プライマリ・ホスト名およびIPアドレスは、`hostname` および `ipconfig` コマンドを実行することで確認できます。次のように指定します。

```
prompt> hostname  
test-pc2  
  
prompt> ipconfig  
Windows 2000 IP Configuration  
Ethernet adapter Local Area Connection:  
  Connection-specific DNS Suffix . :  
  IP Address . . . . . : 139.185.140.166  
  Subnet Mask . . . . . : 255.255.255.0  
  Default Gateway . . . . . : 139.185.140.1
```

プライマリ・アダプタが、Forms/Reports Services で使用するものと異なる場合は、次のいずれかの方法を選択します。

- Forms/Reports Services で使用するネットワーク・アダプタをプライマリ・ネットワーク・アダプタに変更します。
- ネットワーク・アダプタは変更せず、インストール後に `chgiphost` スクリプトを実行します。

Windows でプライマリ・ネットワーク・アダプタを判別する方法については、[5-10 ページ](#) の「[プライマリ・ネットワーク・アダプタの指定](#)」で説明されています。

5.5.3 複数の別名を持つコンピュータへのインストール

複数の別名を持つコンピュータとは、同一の IP で複数の別名をネーミング・サービスに登録しているコンピュータです。ネーミング・サービスはこれらの別名を名前解決して、同一のコンピュータを指定します。

このようなコンピュータに Forms/Reports Services をインストールする前に、次のことを行う必要があります。

- コンピュータへのループバック・アダプタのインストール
- ループバック・アダプタがプライマリ・ネットワーク・アダプタであることの確認

ループバック・アダプタをインストールすると問合せがローカルで実行されるため、Forms/Reports Services でホスト名を問い合わせるときには、常に同じ名前が取得されるようになります。ループバック・アダプタがない場合、問合せの結果はネーミング・サービスから返されるため、問合せによってコンピュータの別名のいずれかが返されます。

Windows でどのアダプタがプライマリ・アダプタになるかを判別する方法については、[5-10 ページ](#) の「[プライマリ・ネットワーク・アダプタの指定](#)」を参照してください。

ループバック・アダプタのインストール方法については、[第 5.5.5 項「ループバック・アダプタのインストール」](#) を参照してください。

5.5.4 ネットワーク接続されていないコンピュータへのインストール

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services は、ラップトップ・コンピュータのようなネットワーク接続されていないコンピュータにもインストールできます。ネットワーク接続されていないコンピュータは、他のコンピュータにアクセスできないため、必要なコンポーネントすべてをインストールする必要があります。

Forms/Reports Services のインストール後もコンピュータをネットワークに接続しない場合は、そのコンピュータに Forms/Reports Services をインストールしてください。

インストール後にコンピュータをネットワークに接続する場合は、ネットワークに接続されていないコンピュータに Forms/Reports Services をインストールする前に、次の手順を実行します。

1. ループバック・アダプタをコンピュータにインストールします。[第 5.5.5 項「ループバック・アダプタのインストール」](#) を参照してください。

ループバック・アダプタとローカル IP アドレスが、ネットワーク・コンピュータをシミュレートしたものになります。コンピュータをネットワークに接続する場合も、Forms/Reports Services ではローカル IP およびホスト名を使用します。

2. テスト対象のコンピュータ自体で Ping を実行します。その際には、ホスト名のみを指定した Ping と、完全修飾名を指定した Ping を実行してください。

たとえば、`mycomputer` というコンピュータにループバック・アダプタをインストールした場合は、次のように指定します。

<code>prompt> ping mycomputer</code>	<i>Ping itself using just the hostname.</i>
<code>Reply from 10.10.10.10</code>	<i>Returns local IP.</i>
<code>prompt> ping mycomputer.mydomain.com</code>	<i>Ping using a fully qualified name.</i>
<code>Reply from 10.10.10.10</code>	<i>Returns local IP.</i>

注意： テスト対象のコンピュータ自体で Ping を実行すると、ping コマンドはローカル IP (ループバック・アダプタの IP) を返す必要があります。

ping が失敗した場合は、ネットワーク管理者に連絡してください。

インストール後にコンピュータをネットワークに接続する場合

インストール後にコンピュータをネットワークに接続すると、コンピュータ上の Forms/Reports Services インスタンスをネットワーク上の他のインスタンスとともに使用できるようになります。コンピュータにはループバック・アダプタをインストールしておく必要があることに注意してください。コンピュータは、接続先のネットワークに応じて、静的 IP または DHCP を使用できます。

詳細は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。

5.5.5 ループバック・アダプタのインストール

ループバック・アダプタは次のような場合に必要です。

- DHCP コンピュータ上にインストールする場合（[第 5.5.1 項「DHCP コンピュータへのインストール」](#)を参照）
- ネットワーク接続されていないコンピュータにインストールした後、そのコンピュータをネットワークに接続する場合（[第 5.5.4 項「ネットワーク接続されていないコンピュータへのインストール」](#)を参照）

ループバック・アダプタをインストールする手順は、Windows のバージョンによって異なります。

- [第 5.5.1 項「コンピュータにループバック・アダプタがインストールされているかどうかの確認」](#)
- [第 5.5.2 項「ループバック・アダプタのインストール - Windows NT」](#)
- [第 5.5.3 項「ループバック・アダプタのインストール - Windows 2000」](#)
- [第 5.5.4 項「ループバック・アダプタのインストール - Windows 2003/Windows XP」](#)
- [第 5.5.5 項「ループバック・アダプタの削除 - Windows NT」](#)
- [第 5.5.6 項「ループバック・アダプタの削除 - Windows 2000/Windows 2003/Windows XP」](#)

5.5.1 コンピュータにループバック・アダプタがインストールされているかどうかの確認

コンピュータにループバック・アダプタがインストールされているかどうかを確認するには、`ipconfig /all` コマンドを実行します。

```
prompt> ipconfig /all
```

ループバック・アダプタがインストールされている場合は、ループバック・アダプタの値をリストするセクションが表示されます。次に例を示します。

```
Ethernet adapter Local Area Connection 2:
  Connection-specific DNS Suffix  .  :
    Description . . . . . : Microsoft Loopback Adapter
    Physical Address. . . . . : 02-00-4C-4F-4F-50
    DHCP Enabled. . . . . : Yes
    Autoconfiguration Enabled . . . . : Yes
    Autoconfiguration IP Address. . . . : 169.254.25.129
    Subnet Mask . . . . . : 255.255.0.0
```

5.5.5.2 ループバック・アダプタのインストール - Windows NT

Windows NT では、最初にインストールしたネットワーク・アダプタで送信が行われるため、Windows NT でのループバック・アダプタのインストールは、他の Windows プラットフォームの場合と比べて複雑です。DHCP コンピュータにはすでにネットワーク・アダプタがあるため、それをまず削除してから後で再インストールする必要があります。これにより、ループバック・アダプタが最初にインストールしたネットワーク・アダプタになります。この項では、次のトピックでその方法について説明します。

- [「高レベルでの手順」 5-15 ページ](#)
- [「要件」 5-15 ページ](#)
- [「詳細な手順」 5-16 ページ](#)

高レベルでの手順

ループバック・アダプタを Windows NT にインストールするための高レベルでの手順は次のとおりです。

1. コンピュータ上の既存のネットワーク・アダプタに関する情報を収集します。既存のネットワーク・アダプタを削除してから再インストールする必要があるため、このステップは不可欠です。
2. ループバック・アダプタをインストールします。
3. 既存のネットワーク・アダプタを削除します。
4. ループバック・アダプタを構成します。
5. コンピュータを再起動します。
6. ネットワーク・アダプタを再インストールします。
7. コンピュータを再起動します。

要件

Windows NT にループバック・アダプタをインストールするには、次のものが必要です。

- Windows NT のインストール CD。これは、ループバック・アダプタをインストールする際に必要になります。
- ネットワーク・アダプタのドライバ。ネットワーク・アダプタを再インストールする際に必要になります。

詳細な手順

- 再インストールできるように、既存のネットワーク・アダプタに関する情報を収集します。一般的には、次の情報が必要です。

表 5-5 既存のネットワーク・アダプタに関する情報

項目	値を調べる場所
IP アドレス	「コントロールパネル」の「ネットワーク」にある「アダプタ」タブ。ネットワーク・アダプタを選択し、「プロパティ」をクリックします。
サブネット・マスク	「コントロールパネル」の「ネットワーク」にある「プロトコル」タブ。「TCP/IP」を選択し、「プロパティ」をクリックします。「プロパティ」ダイアログで「IP アドレス」タブを選択し、「詳細」をクリックします。
WINS サーバー・アドレス	「コントロールパネル」の「ネットワーク」にある「プロトコル」タブ。「TCP/IP」を選択し、「プロパティ」をクリックします。「プロパティ」ダイアログで、「WINS アドレス」タブを選択します。
DNS サーバー・アドレス	「コントロールパネル」の「ネットワーク」にある「プロトコル」タブ。「TCP/IP」を選択し、「プロパティ」をクリックします。「プロパティ」ダイアログで、「DNS」タブを選択します。

- Windows NT のインストール CD を CD-ROM ドライブに挿入します。
- デスクトップで「ネットワーク コンピュータ」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。「コントロールパネル」の「ネットワーク」が表示されます。
- 「アダプタ」タブを選択します。
- 「追加」をクリックします。
- 「MS Loopback Adapter」を選択し、「OK」をクリックします。
- 「MS Loopback アダプタ カードセットアップ」ダイアログで「OK」をクリックし、デフォルトのフレーム・タイプ（デフォルト値は 802.3）を適用します。

8. Windows NT CD-ROM の場所 (E:¥386 など) を入力し、「続行」をクリックします。ループバック・アダプタがインストールされると、「コントロールパネル」の「ネットワーク」にすべてのネットワーク・アダプタが表示されます (図 5-1)。

図 5-1 ループバック・アダプタを表示している「コントロールパネル」の「ネットワーク」



9. 「コントロールパネル」の「ネットワーク」で、ループバック・アダプタより先にインストールされていたネットワーク・アダプタを削除します。ネットワーク・アダプタを選択し、「削除」をクリックします。
- これは、ループバック・アダプタを最初のネットワーク・アダプタにするために必要な作業です。この例では、Intel 社のネットワーク・アダプタを削除します。削除したネットワーク・アダプタは、後で再インストールします。
10. 「コントロールパネル」の「ネットワーク」で、「閉じる」をクリックします。「Microsoft TCP/IP のプロパティ」ダイアログが表示されます (図 5-2)。

11. 「Microsoft TCP/IP のプロパティ」 ダイアログで「MS Loopback Adapter」を選択し、次の情報を入力します。

IP アドレス : ループバック・アダプタ用にルーティング不能な IP を入力します。ルーティング不能なアドレスとして、次の値を入力することをお薦めします。

192.168.x.x (x は 1 ~ 255 の任意の値)

10.10.10.10

サブネットマスク : 255.255.255.0 と入力します。

「OK」をクリックします。

図 5-2 ループバック・アダプタの値を表示している「Microsoft TCP/IP のプロパティ」ダイアログ



12. コンピュータを再起動します。

13. コンピュータが再起動されたら、本来のネットワーク・アダプタを再インストールします。

14. コンピュータをもう一度再起動します。

5.5.5.3 ループバック・アダプタのインストール - Windows 2000

Windows 2000 では、最後にインストールしたネットワーク・アダプタで送信が行われます。つまり、ループバック・アダプタをインストール後に他のネットワーク・アダプタをインストールした場合は、ループバック・アダプタを削除してから、再インストールする必要があります。ループバック・アダプタは、コンピュータにインストールした最後のネットワーク・アダプタである必要があります。

ループバック・アダプタを Windows 2000 にインストールする手順は次のとおりです。

1. 「スタート」 → 「設定」 → 「コントロール パネル」を選択します。
2. 「ハードウェアの追加と削除」をダブルクリックします。「ハードウェアの追加と削除 ウイザード」が起動します。
3. 「ようこそ」ページ: 「次へ」をクリックします。
4. 「ハードウェアに関する作業の選択」ページ: 「デバイスの追加 / トラブルシューティング」を選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「ハードウェア デバイスの選択」ページ: 「新しいデバイスの追加」を選択し、「次へ」をクリックします。
6. 「新しいハードウェアの検索」ページ: 「いいえ、一覧からハードウェアを選択します」を選択し、「次へ」をクリックします。
7. 「ハードウェアの種類」ページ: 「ネットワーク アダプタ」を選択し、「次へ」をクリックします。
8. 「ネットワーク アダプタの選択」ページ

製造元: 「Microsoft」を選択します。

ネットワーク アダプタ: 「Microsoft Loopback Adapter」を選択します。

「次へ」をクリックします。

9. 「ハードウェアのインストールの開始」ページ: 「次へ」をクリックします。
10. 「ハードウェアの追加と削除 ウィザードの完了」ページ: 「完了」をクリックします。
11. デスクトップで「マイ ネットワーク」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。「コントロール パネル」の「ネットワークとダイアルアップ接続」が表示されます。
12. 先ほど作成した接続を右クリックします。これは通常、「ローカル エリア接続 2」です。「プロパティ」を選択します。
13. 「全般」タブで「インターネット プロトコル (TCP/IP)」を選択し、「プロパティ」をクリックします。

14. 「プロパティ」ダイアログで、次の値を入力します（図 5-3）。

IP アドレス：ループバック・アダプタ用にルーティング不能な IP を入力します。ルーティング不能なアドレスとして、次の値を入力することをお薦めします。

192.168.x.x (x は 1 ~ 255 の任意の値)

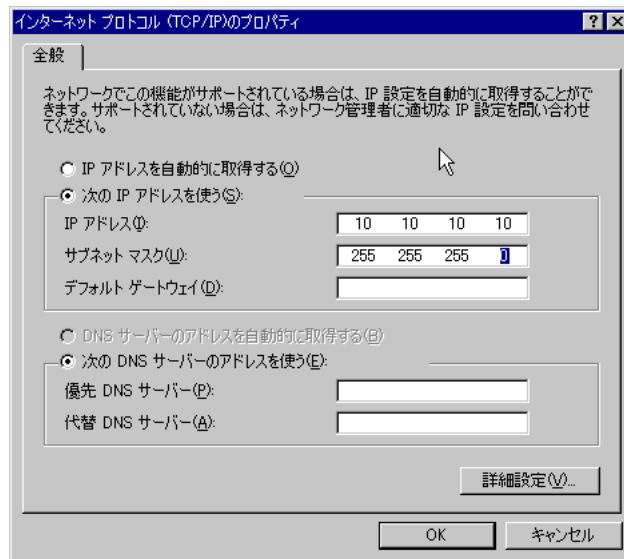
10.10.10.10

サブネットマスク：255.255.255.0 と入力します。

他のフィールドは空白にしておきます。

「OK」をクリックします。

図 5-3 ループバック・アダプタの値を表示している「インターネットプロトコル (TCP/IP) のプロパティ」ダイアログ



15. 「ローカルエリア接続 2 のプロパティ」ダイアログで、「OK」をクリックします。

16. コンピュータを再起動します。

17. C:\winnt\System32\drivers\etc\hosts ファイルに次の形式で行を追加します。

IP_address hostname.domainname hostname

ファイル内の localhost 行の後に挿入します。

IP_address を、ステップ 14 で入力したルーティング不能な IP アドレスに置き換えます。

hostname と domainname を、適切な値に置き換えます。

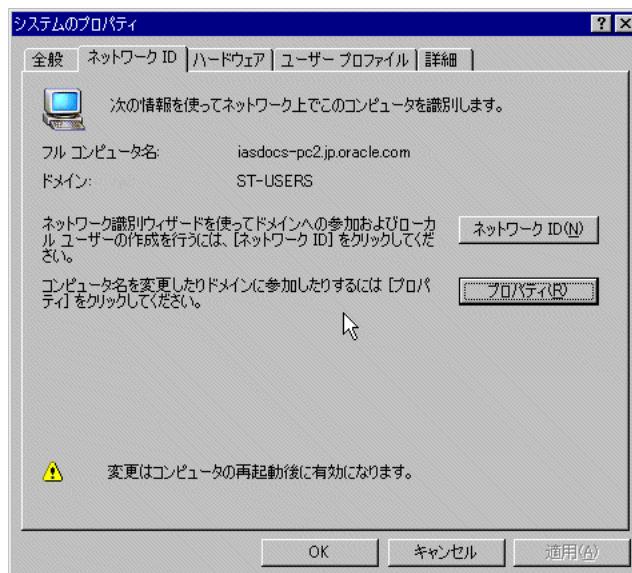
例：

10.10.10.10 mycomputer.mydomain.com mycomputer

18. ネットワーク構成を確認します。

- a. 「コントロール パネル」の「システム」を開き、「ネットワーク ID」タブを選択します。「フル コンピュータ名」に、ホスト名およびドメイン名が表示されていることを確認します（図 5-4）。

図 5-4 「システム」の「ネットワーク ID」タブ



- b. 「プロパティ」をクリックします。「コンピュータ名」にはホスト名、「フルコンピュータ名」にはホスト名とドメイン名が表示されます（図 5-5）。

図 5-5 「識別の変更」ダイアログ



- c. 「詳細」をクリックします。「このコンピュータのプライマリ DNS サフィックス」には、ドメイン名が表示されます（図 5-6）。

図 5-6 「DNS サフィックスと NetBIOS コンピュータ名」ダイアログ



5.5.5.4 ループバック・アダプタのインストール - Windows 2003/Windows XP

ループバック・アダプタを Windows 2003 または Windows XP にインストールする手順は次のとおりです。

1. 「スタート」→「コントロールパネル」を選択します。
2. 「ハードウェアの追加」をダブルクリックします。「ハードウェアの追加ウィザード」が起動します。
3. 「ようこそ」ページ: 「次へ」をクリックします。
4. 「ハードウェアは接続されていますか?」ページ: 「はい、ハードウェアを接続しています」を選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「次のハードウェアは既にコンピュータ上にインストールされています」ページ: 「新しいハードウェアデバイスの追加」を選択し、「次へ」をクリックします。
6. 「ウィザードで、ほかのハードウェアをインストールできます」ページ: 「一覧から選択したハードウェアをインストールする」を選択し、「次へ」をクリックします。
7. 「次の一覧からインストールするハードウェアの種類を選択してください」ページ: 「ネットワークアダプタ」を選択し、「次へ」をクリックします。
8. 「ネットワークアダプタの選択」ページ
製造元: 「Microsoft」を選択します。
ネットワークアダプタ: 「Microsoft Loopback Adapter」を選択します。
「次へ」をクリックします。
9. 「ハードウェアをインストールする準備ができました」ページ: 「次へ」をクリックします。
10. 「ハードウェアの追加ウィザードの完了」ページ: 「完了」をクリックします。
11. (Windows 2003) コンピュータを再起動します。
12. デスクトップで「マイネットワーク」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。「コントロールパネル」の「ネットワーク接続」が表示されます。
13. 先ほど作成した接続を右クリックします。これは通常、「ローカルエリア接続2」です。「プロパティ」を選択します。
14. 「全般」タブで「インターネットプロトコル(TCP/IP)」を選択し、「プロパティ」をクリックします。

15. 「プロパティ」ダイアログで、次の値を入力します (図 5-3)。

IP アドレス : ループバック・アダプタ用にルーティング不能な IP を入力します。ルーティング不能なアドレスとして、次の値を入力することをお薦めします。

192.168.x.x (x は 1 ~ 255 の任意の値)

10.10.10.10

サブネットマスク : 255.255.255.0 と入力します。

その他のフィールドは空白にしておきます。

「OK」をクリックします。

16. 「ローカルエリア接続 2 のプロパティ」ダイアログで、「OK」をクリックします。

17. コンピュータを再起動します。

18. C:\Windows\system32\drivers\etc\hosts ファイルに次の形式で行を追加します。

IP_address hostname.domainname hostname

ファイル内の localhost 行の後に挿入します。

IP_address を、ステップ 15 で入力したルーティング不能な IP アドレスに置き換えます。

hostname と *domainname* を、適切な値に置き換えます。

例 :

10.10.10.10 mycomputer.mydomain.com mycomputer

19. ネットワーク構成を確認します。

a. 「コントロールパネル」の「システム」を開き、「コンピュータ名」タブを選択します。「フルコンピュータ名」に、ホスト名およびドメイン名が表示されていることを確認します。

b. 「変更」をクリックします。「コンピュータ名」にはホスト名、「フルコンピュータ名」にはホスト名とドメイン名が表示されます (図 5-5)。

c. 「詳細」をクリックします。「このコンピュータのプライマリ DNS サフィックス」には、ドメイン名が表示されます (図 5-6)。

5.5.5.5 ループバック・アダプタの削除 - Windows NT

Windows NT のループバック・アダプタを削除する手順は次のとおりです。

1. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」を選択します。
2. 「ネットワーク」をダブルクリックします。
3. 「アダプタ」タブを選択します。
4. 「MS Loopback Adapter」を選択し、「削除」をクリックします。
5. コンピュータを再起動します。

5.5.5.6 ループバック・アダプタの削除 - Windows 2000/Windows 2003/Windows XP

Windows 2000 または Windows XP のループバック・アダプタを削除する手順は次のとおりです。

1. 「コントロールパネル」の「システム」を表示します。
Windows 2000: 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」を選択し、「システム」をダブルクリックします。
Windows 2003: 「スタート」→「コントロールパネル」→「システム」を選択します。
Windows XP: 「スタート」→「コントロールパネル」を選択し、「システム」をダブルクリックします。
2. 「ハードウェア」タブで「デバイスマネージャ」をダブルクリックします。
3. 「デバイスマネージャ」ウィンドウで、「ネットワークアダプタ」を開きます。「Microsoft Loopback Adapter」が表示されます。
4. 「Microsoft Loopback Adapter」を右クリックし、「アンインストール」をクリックします。

5.5.6 CD-ROM または DVD からハード・ドライブへのコピー、ハード・ドライブからのインストール

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の CD-ROM または DVD からインストールするかわりに、CD-ROM または DVD の内容をハード・ドライブにコピーし、ハード・ドライブからインストールすることができます。ネットワークに Oracle

Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services インスタンスを多数インストールする場合、または Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services をインストールするコンピュータに CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブがない場合は、この方法のほうが簡単です。

リモート CD-ROM または DVD ドライブからインストールすることもできます。詳細は、[第 5.5.7 項「リモート CD-ROM または DVD ドライブからのインストール」](#) を参照してください。

他のコンピュータからハード・ドライブへアクセスする場合

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services を、CD-ROM または DVD からハード・ドライブにコピーしてからリモート・コンピュータにインストールする手順は次のとおりです。

1. ローカル・コンピュータでハード・ドライブを共有します。
2. Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services をインストールするコンピュータで、共有されたハード・ドライブへのマッピングを行います。
3. Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services をインストールするリモート・コンピュータで、インストーラを起動します。

インストーラにアクセスするには、マッピングされたドライブのドライブ文字を使用する必要があることにご注意ください (H:\orawinfrs\setup.exe など)。

汎用命名規則 (UNC) の構文 (\\hostname\sharename) を使用してインストーラにアクセスすることはできません。

ハード・ドライブからインストールするときは、CD-ROM の交換を求めるメッセージは表示されません。適切な場所にコピーされている場合は、インストーラが自動的にファイルを探します。

CD-ROM をコピーするには：

1. ハード・ディスク上にディレクトリ構造を作成します。

親ディレクトリ（たとえば、`orawinfrs`などの任意の名前）を作成する必要があります。この親ディレクトリの中に、`Disk1`という名前のサブディレクトリを作成します。サブディレクトリの名前は `DiskN` である必要があります。この `N` は、CD-ROM の番号を表します。

2. CD-ROM の内容を該当するディレクトリにコピーします。

ファイルは、Windows Explorer またはコマンドラインを使用してコピーできます。コマンドラインを使用する場合は、`xcopy` コマンドを使用できます。

次の例では、ドライブ `E:` が CD-ROM ドライブで、`C:\orawinfrs\DiskN` は、CD-ROM のコピー先のディレクトリであると想定します。

```
E:¥> xcopy /e /i E:¥904disk1 C:\orawinfrs\Disk1
```

コピーしたファイルからインストーラを起動するには、`setup.exe` 実行可能ファイルを `Disk1` ディレクトリで実行します。このファイルは、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services を稼動するコンピュータで実行します。

```
C:¥> cd orawinfrs\Disk1
C:\orawinfrs\Disk1> setup.exe
```

DVD の orawinfrs ディレクトリをコピーするには：

`orawinfrs` ディレクトリは、Windows Explorer またはコマンドラインを使用してコピーできます。コマンドラインを使用する場合の手順は次のとおりです。

1. (省略可能) `orawinfrs` ディレクトリの内容が格納されるディレクトリを作成します。
2. DVD の `orawinfrs` ディレクトリをハード・ディスクにコピーします。

次の例では、ドライブ `E:` が DVD-ROM ドライブで、`C:\orawinfrs` がコピー先のディレクトリであると想定します。

```
E:¥> xcopy /e /i E:¥orawinfrs C:\orawinfrs
```

コピーしたファイルからインストーラを起動するには、`setup.exe` 実行可能ファイルを、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services を稼動するコンピュータで実行します。

```
C:¥> cd orawinfrs
C:\orawinfrs> setup.exe
```

5.5.7 リモート CD-ROM または DVD ドライブからのインストール

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services のインストール先のコンピュータに CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブがない場合、リモート CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブからインストールを実行することができます。次の点を確認してください。

リモート・コンピュータで CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブを共有する場合

リモート CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブでは、共有アクセスを許可しておく必要があります。これを設定するには、CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブが存在するリモート・コンピュータで次の手順を実行します。

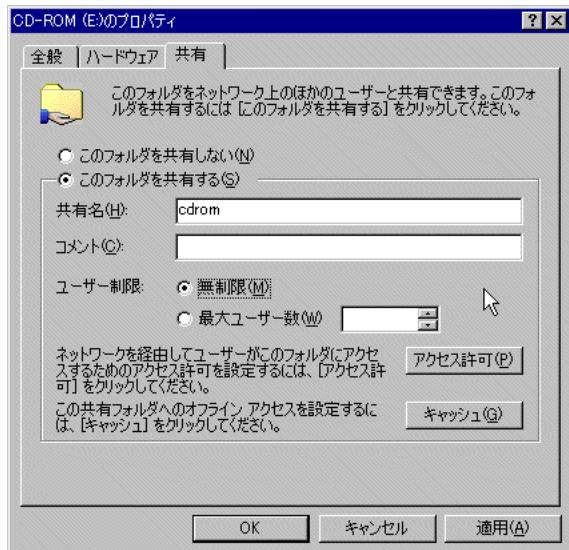
1. リモート・コンピュータに Administrator ユーザーとしてログインします。
2. Windows Explorer を起動します。
3. CD-ROM または DVD ドライブ文字を右クリックし、「共有」(Windows 2000、Windows NT) または「共有とセキュリティ」(Windows 2003、Windows XP) を選択します。
4. 「共有」タブで、次のことを行います (図 5-7)。
「このフォルダを共有する」を選択します。

共有名 : cdrom または dvd などの共有名を指定します。この名前は、ローカル・コンピュータで CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブへのマッピングを行うときに使用します。5-30 ページのステップ d を参照してください。

「アクセス許可」をクリックします。Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services をインストールするためにこのドライブへアクセスするユーザーは、少なくとも「読み取り」アクセス許可が必要です。

作業が終わったら、「OK」をクリックします。

図 5-7 CD-ROM ドライブの共有



5. CD-ROM: Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services のディスク 1 を CD-ROM ドライブに挿入します。

DVD: Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の DVD を DVD ドライブに挿入します。

ローカル・コンピュータで CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブへのマッピングを行う場合

ローカル・コンピュータで CD-ROM または DVD ドライブへのマッピングを行ってからインストーラを起動する手順は次のとおりです。

1. リモート CD-ROM/DVD ドライブへのマッピングを行います。
 - a. Windows Explorer をローカル・コンピュータで起動します。
 - b. 「ツール」 → 「ネットワーク ドライブの割り当て」を選択します。「ネットワーク ドライブの割り当て」ダイアログが表示されます。
 - c. リモート CD-ROM または DVD ドライブに使用するドライブ文字を選択します。

- d. 「フォルダ」に、リモート CD-ROM または DVD ドライブの場所を次の形式で入力します。

¥¥remote_hostname¥share_name

remote_hostname を、CD-ROM または DVD ドライブがあるリモート・コンピュータの名前に置き換えます。

share_name を、[5-28 ページ](#)のステップ 4 で入力した共有名に置き換えます。

例: ¥¥computer2¥cdrom

- e. リモート・コンピュータに別のユーザーとして接続する必要がある場合は、次のことを行います。

Windows NT: 「ユーザー名」にユーザー名を入力します。

Windows 2000、Windows 2003、Windows XP: 「異なるユーザー名」をクリックし、ユーザー名を入力します。

- f. 「OK」(Windows NT) または「完了」(Windows 2000、Windows 2003、Windows XP) をクリックします。

2. マッピングした CD-ROM または DVD ドライブからインストーラを起動します。

CD-ROM の交換を求めるメッセージが表示されたら、CD-ROM を取り出して指定の CD-ROM を挿入します。

注意: CD-ROM を交換するとき、インストーラは実行したままである必要があります。CD-ROM の交換時に、インストーラは絶対終了しないでください。インストーラを終了した場合、インストールを途中から続行することはできません。また、一部だけ作成されたインストールは使用できません。手動で削除する必要が生じることもあります。

5.5.8 リモート・コントロール・ソフトウェアを使用したリモート・コンピュータへのインストール

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services をリモート・コンピュータにインストールして稼動させると (つまり、リモート・コンピュータにハード・ドライブがあり、Forms/Reports Services コンポーネントを実行するとき) にコンピュータへの物理的なアクセスが不可能な場合、リモート・コンピュータ上で VNC または Symantec 社の pcAnywhere などのリモート・コントロール・ソフトウェアが実行されていれば、インストールを実行することができます。この場合、ローカル・コンピュータでもリモート・コントロール・ソフトウェアが稼動している必要があります。

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services は、次のいずれかの方法を使用してリモート・コンピュータにインストールすることができます。

- Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の CD-ROM または DVD の内容をハード・ドライブにコピーした場合は、そのハード・ドライブからインストールできます。
- ローカル・コンピュータのドライブに CD-ROM または DVD を挿入して、その CD-ROM または DVD からインストールできます。

ハード・ドライブからのインストール

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の CD-ROM または DVD の内容をハード・ドライブにコピーした場合は、そのハード・ドライブからインストールできます。

インストールの手順は次のとおりです。

1. リモート・コンピュータとローカル・コンピュータの両方に、リモート・コントロール・ソフトウェアがインストールされて稼動していることを確認します。
2. Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の CD-ROM または DVD の内容を格納するハード・ドライブを共有します。
3. リモート・コンピュータで、共有ハード・ドライブへのドライブ文字のマッピングを行います。リモート・コンピュータでのこの作業には、リモート・コントロール・ソフトウェアを使用します。
4. リモート・コントロール・ソフトウェアを使用して、リモート・コンピュータのインストーラを起動します。共有ハード・ドライブからインストーラにアクセスします。

リモート CD-ROM または DVD ドライブからのインストール

ローカル・コンピュータのドライブに CD-ROM または DVD を挿入して、その CD-ROM または DVD からインストールできます。これは、[第 5.5.7 項「リモート CD-ROM または DVD ドライブからのインストール」](#) の例と類似しています。

インストールの手順は次のとおりです。

1. リモート・コンピュータとローカル・コンピュータの両方に、リモート・コントロール・ソフトウェアがインストールされて稼動していることを確認します。
 2. ローカル・コンピュータで、CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブを共有します。
- リモート・コンピュータで、共有 CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブへのドライブ文字のマッピングを行います。リモート・コンピュータでのこの作業には、リモート・コントロール・ソフトウェアを使用します。

この手順は、[第 5.5.7 項「リモート CD-ROM または DVD ドライブからのインストール」](#) で説明されています。

- リモート・コントロール・ソフトウェアを使用して、リモート・コンピュータのインストーラを起動します。共有 CD-ROM または DVD ドライブからインストーラにアクセスします。

5.6 インストーラが実行する前提条件チェック

表 5-6 に、インストーラが実行する前提条件チェックを示します。

表 5-6 インストーラが実行する前提条件チェック

項目	説明
ユーザー	ユーザーが管理者権限を持っているかどうかをチェックします。
プロセッサ	プロセッサの処理能力の要件については、表 5-1 を参照してください。
モニター	最低でも 256 色表示するよう構成されているかどうかをチェックします。
オペレーティング・システム のバージョン	サポートされているバージョンについては、表 5-1 を参照してください。
Windows の Service Pack	サポートされている Service Pack については、表 5-1 を参照してください。
メモリー	推奨値については、表 5-1 を参照してください。
合計ページファイル・サイズ (仮想メモリー)	推奨値については、表 5-1 を参照してください。
TEMP ディレクトリの容量	推奨値については、表 5-1 を参照してください。
インスタンス名	Forms/Reports Services のインストール先のコンピュータに同じ名前のインスタンスが存在しないかどうかをチェックします。
Oracle ホーム・ディレクトリ 名	Oracle ホーム・ディレクトリ名にスペースが含まれていないかどうかをチェックします。
Oracle ホーム・ディレクトリ へのパス	Oracle ホーム・ディレクトリへのパスの長さが最大 127 文字であるかどうかをチェックします。
Oracle ホーム・ディレクトリ の内容	Oracle ホーム・ディレクトリに、インストール障害を引き起こすファイルが含まれていないかどうかをチェックします。

表 5-6 インストーラが実行する前提条件チェック（続き）

項目	説明
Oracle ホーム・ディレクトリ	<p>Forms/Reports Services は、新しいディレクトリにインストールする必要があります。ここで、許可されていないインストール例をいくつか紹介します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 8.0、8i、9.0.1 または 9.2 データベースの Oracle ホームへの、Oracle Application Server のインストール ■ Oracle Management Service の Oracle ホームへの、Oracle Application Server のインストール ■ Oracle Collaboration Suite の Oracle ホームへの、Oracle Application Server のインストール ■ Oracle HTTP Server のスタンドアロン Oracle ホームへの、Oracle Application Server のインストール ■ OracleAS Web Cache のスタンドアロン Oracle ホームへの、Oracle Application Server のインストール ■ Oracle9i Developer Suite 9.0.2 の Oracle ホームへの、Oracle Application Server のインストール ■ Oracle Application Server Containers for J2EE のスタンドアロン Oracle ホームへの、Oracle Application Server のインストール ■ Oracle9iAS 1.0.2.2 の Oracle ホームへの、Oracle Application Server のインストール ■ Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2 または 10g (9.0.4) の Oracle ホームへの、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services のインストール ■ Oracle9iAS 9.0.2 または 9.0.3 Middle-Tier の Oracle ホームへの、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services のインストール ■ Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2 または 10g (9.0.4) の Oracle ホームへの、OracleAS Developer Kits 10g のインストール ■ Oracle9iAS 9.0.2 または 9.0.3 Middle-Tier の Oracle ホームへの、OracleAS Developer Kits 10g のインストール ■ Oracle Developer Suite 9.0.2 または 10g (9.0.4) の Oracle ホームへの、OracleAS Developer Kits 10g のインストール ■ Oracle9iAS9.0.2 の Oracle ホームへの、OracleAS Infrastructure 10g のインストール ■ Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services または OracleAS Developer Kits 10g の Oracle ホームへの、OracleAS Infrastructure 10g のインストール ■ Oracle Developer Suite 9.0.2 または 10g (9.0.4) の Oracle ホームへの、OracleAS Infrastructure 10g のインストール

表 5-6 インストーラが実行する前提条件チェック（続き）

項目	説明
静的ポートの競合	指定した場合、staticports.ini ファイルにリストされているポートをチェックします。第 3.1 項「ポート」を参照してください。
Oracle Enterprise Manager ディレクトリの書き込み確認	中間層を実行する場合、または Forms/Reports Services を同じ Oracle ホームに再インストールする場合にのみチェックします。インストーラを実行するオペレーティング・システム・ユーザーが、次のディレクトリに書き込むことができるかどうかをチェックします。 <ul style="list-style-type: none"> ■ ORACLE_HOME\$\sysman\$\emd ■ ORACLE_HOME\$\sysman\$\config ■ ORACLE_HOME\$\sysman\$\webapps\$\emd\$\WEB-INF\$\config
Oracle Enterprise Manager ファイルの有無	中間層を実行する場合、または Forms/Reports Services を同じ Oracle ホームに再インストールする場合にのみチェックします。次のファイルが存在するかどうかをチェックします。 <ul style="list-style-type: none"> ■ %ORACLE_HOME%\sysman\config\iasadmin.properties ■ %ORACLE_HOME%\sysman\webapps\emd\WEB-INF\config\consoleConfig.xml

6

インストールを始める前の基礎知識

この章は、次の項で構成されています。

- 第 6.1 項 「Oracle ホーム・ディレクトリ」
- 第 6.2 項 「Oracle ホーム名」
- 第 6.3 項 「他の言語のインストール」
- 第 6.4 項 「Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services のインスタンスとインスタンス名」
- 第 6.5 項 「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」
- 第 6.6 項 「インストーラが使用するファイルの保存先」
- 第 6.7 項 「Oracle Universal Installer の起動」

6.1 Oracle ホーム・ディレクトリ

Forms/Reports Services をインストールするディレクトリは、Oracle ホームと呼びます。インストールの際には、このディレクトリへのフルパスとこの Oracle ホームの名前を指定します。

たとえば、Forms/Reports Services を C:\oracle\orawinfrs にインストールし、これに frs904 という名前を付けることができます。

この名前の使用方法については、[第 6.2 項「Oracle ホーム名」](#) を参照してください。

6.2 Oracle ホーム名

インストーラの画面の中で、Oracle ホーム・ディレクトリ（インストール先ディレクトリ）と Oracle ホームの名前を指定する必要があります。この Oracle ホーム名には、ディレクトリと同じ名前を付ける必要はありません。Oracle ホーム名には、最大 128 文字の英数字とアンダースコア（_）記号を使用できます。

Oracle ホーム名は次のように使用されます。

- Forms/Reports Services コンポーネントには、Windows サービスとして実行されるものがあります。インストーラでは、これらのサービス名に名前を付ける場合に、次の形式で Oracle ホーム名が追加されます。

Oracle<OracleHomeName><ComponentName>

- また、この Oracle ホーム名は「スタート」メニュー項目にも使用されます。

6.3 他の言語のインストール

デフォルトでは、Forms/Reports Services は、英語とオペレーティング・システムの言語のテキストでインストールされます。他の言語をインストールする必要がある場合は、「使用可能な製品コンポーネント」画面で「製品の言語」をクリックします。

インストールの後に他の言語をインストールすることはできません。他の言語はアプリケーションのインストール時にインストールする必要があります。インストールしていない言語を使用する環境で Forms/Reports Services を実行した場合、ユーザー・インターフェースはその言語または英語（あるいはその両方）で表示されるか、テキストのかわりに（不明なフォントを意味する）四角形のボックスが表示される場合もあります。

6.4 Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services のインスタンスとインスタンス名

Forms/Reports Services をインストールすると、Forms/Reports Services のインスタンスが作成されます。インストーラによって、Forms/Reports Services のインスタンスの名前の入力を求められます。たとえば、インスタンスに `frs904` や `J2EE_904` という名前を付けることができます。また、Oracle ホームとは異なる名前を付けることができます。

この名前はインストール後に変更できません。

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services では、インスタンス名にホスト名とドメイン名を付けて完全なインスタンス名が作成されます。たとえば、`c1` という名前のコンピュータにインスタンスをインストールし、そのインスタンスに `frs1` という名前を付けた場合、インスタンスの完全な名前は `frs1.c1.mydomain.com` になります。この場合、ドメイン名が `mydomain.com` であると想定します。

インスタンス名の有効な文字

インスタンス名には、英数字 (A ~ Z, a ~ z, 0 ~ 9) と、\$ または _ (アンダースコア) 記号のみを使用できます。

インスタンス名に文字数の制限はありません。

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services でインスタンス名が使用される仕組み

インスタンス名は重要です。Forms/Reports Services では、この名前を使用してインスタンスを識別するからです。そのため、複数の Forms/Reports Services のインスタンス (OracleAS Infrastructure 10g と J2EE and Web Cache のインスタンスなど) を同一のコンピュータにインストールする場合は、インスタンスごとに異なる名前を付ける必要があります。

Forms/Reports Services を Oracle Enterprise Manager Application Server Control (または Application Server Control) を使用して管理する場合は、画面上にインスタンス名が表示されます。このインスタンス名をクリックすることで、そのインスタンスに関する詳細を表示することができます。たとえば、そのインスタンスにインストールされているコンポーネント、コンポーネントが起動または停止されているかどうか、およびコンポーネントのログ・ファイルを確認できます。Application Server Control は、Forms/Reports Services 用のブラウザ・ベースの管理ツールです。この管理ツールの詳細は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。

また、`dcmctl` コマンドでは、パラメータにインスタンス名が必要になる場合があります。`dcmctl` は、Forms/Reports Services のインスタンスを管理するためのコマンドライン・ツールです。`dcmctl` の詳細は、『Distributed Configuration Management リファレンス・ガイド』を参照してください。

6.5 ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限

インストーラによって、ias_admin ユーザーのパスワードの指定を求められます。ias_admin ユーザーは、Forms/Reports Services のインスタンスの管理ユーザーです。

Application Server Control を使用して Forms/Reports Services のインスタンスを管理するには、ias_admin としてログインします。

1 台のコンピュータに複数の Forms/Reports Services のインスタンスをインストールする場合はインスタンスごとに異なる名前を付けますが、管理ユーザーにはどのインスタンスの場合も ias_admin という同じ名前を使用します。ias_admin ユーザーのパスワードは、インスタンスごとに異なるものを使用できます。

10g (9.0.4) では、Forms/Reports Services のインスタンスごとにパスワードを設定する必要があります。同じオペレーティング・システム・ユーザーとして複数の Forms/Reports Services のインスタンスを同じコンピュータ上にインストールした場合でも、同じコンピュータ上のインスタンスごとに新しいパスワードを入力する必要があります。

ias_admin ユーザーのパスワード

ias_admin ユーザーのパスワードを指定する場合は、次のパスワード・ポリシーに従う必要があります。

- パスワードには最低 5 文字の英数字を使用します。
- 少なくとも数字を 1 つ使用します。

ias_admin ユーザーのパスワードには次の制限があります。

- パスワードは最大 30 文字です。
- パスワードには、データベース・キャラクタ・セットにある英数字、アンダースコア (_)、ドル記号 (\$) および番号記号 (#) のみを使用できます。
- パスワードの先頭には英文字を使用します。パスワードの先頭には、数字、アンダースコア (_)、ドル記号 (\$) または番号記号 (#) を使用できません。
- パスワードに Oracle の予約語は使用できません。予約語の一覧は、『Oracle9i SQL リファレンス』の「付録 C」に記載されています。このガイドは、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) (<http://otn.oracle.co.jp>) から入手できます。または、予約語として使用されている可能性のある用語は使用しないようにします。

パスワードは、次の作業を実行するときに入力する必要があるので、覚えておく必要があります。

- Forms/Reports Services を管理するために Application Server Control にログオンする際には、ias_admin ユーザーとしてログオンします。

パスワードを忘れたときには、パスワードをリセットできます。詳細は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。

6.6 インストーラが使用するファイルの保存先

インストーラが使用するファイルは次のディレクトリに保存されます。

表 6-1 インストーラが使用するファイルの保存先

ディレクトリ	説明
Oracle ホーム・ディレクトリ	このディレクトリには、Forms/Reports Services ファイルが保存されます。このディレクトリは、Forms/Reports Services のインストール時に指定します。
インベントリ・ディレクトリ (<i>system_drive</i> :¥Program Files¥Oracle¥Inventory)	インストーラは、インベントリ・ディレクトリを使用して、コンピュータにインストールされた Oracle 製品を識別します。インベントリ・ディレクトリは、コンピュータに初めて Oracle 製品をインストールしたときに作成されます。その後のインストールでは、同じインベントリ・ディレクトリが使用されます。
TEMP ディレクトリ	インストーラは、インストール時にのみ必要なファイルを一時ディレクトリに保存します。一時ディレクトリは、TEMP 変数によって指定されます。

また、インストーラは Windows レジストリにもエントリを作成します。

6.7 Oracle Universal Installer の起動

1. Windows の Administrator グループのメンバーであるユーザーとして、コンピュータにログインします。

2. ディスクを挿入します。

CD-ROM ユーザー : Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services のディスク 1 を CD-ROM ドライブに挿入します。

DVD ユーザー : Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の DVD を DVD-ROM ドライブに挿入します。DVD は DVD-ROM 形式です。

3. コンピュータが自動実行機能をサポートしている場合は、インストーラは自動的に起動されます。

コンピュータが自動実行機能をサポートしていない場合は、インストーラを手動で起動する必要があります。

CD-ROM ユーザー : `setup.exe` ファイルをダブルクリックします。

DVD ユーザー : `application_server` ディレクトリにある `setup.exe` ファイルをダブルクリックします。

これで、Oracle Universal Installer が起動し、Forms/Reports Services をインストールすることができます。

インストール後の作業

この章では、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services が正常にインストールするためにインストール後に実行する必要がある作業について説明します。

この章は、次の項で構成されています。

- [第 7.1 項 「インストール後の Oracle Application Server 10g \(9.0.4\) Forms and Reports Services のインスタンスの状態」](#)
- [第 7.2 項 「Forms/Reports Services のインストールのテスト」](#)
- [第 7.3 項 「バックアップとリカバリ」](#)
- [第 7.4 項 「SSL」](#)
- [第 7.5 項 「NLS_LANG 環境変数」](#)
- [第 7.6 項 「Forms および Reports アプリケーションの配置」](#)

7.1 インストール後の Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services のインスタンスの状態

インストール後、構成したコンポーネントが起動されます。

ブラウザで「ようこそ」ページと Application Server Control ページを表示することができます。これらのページの URL は、インストーラの最後の画面に表示されます。最後の画面の内容は、ORACLE_HOME\$\install\$\setupinfo.txt ファイルで確認できます。

Forms/Reports Services コンポーネントには、Windows サービスとして実行されるものがあります。これらのサービスは、「サービス」ダイアログで確認できます。「サービス」ダイアログを表示する手順は次のとおりです。

Windows NT: 「スタート」 → 「設定」 → 「コントロールパネル」を選択し、「サービス」をダブルクリックします。

Windows 2000: 「スタート」 → 「プログラム」 → 「管理ツール」 → 「サービス」を選択します。

Windows 2003: 「スタート」 → 「管理ツール」 → 「サービス」を選択します。

Windows XP: 「スタート」 → 「すべてのプログラム」 → 「管理ツール」 → 「サービス」を選択します。

Forms/Reports Services のインスタンスを起動および停止するには、スクリプトを使用するか、Oracle Enterprise Manager Application Server Control を使用します。詳細は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。

7.2 Forms/Reports Services のインストールのテスト

Forms/Reports Services のインストールをテストするには、Windows マシンとブラウザを使用してインストールの OEM ページを呼び出す必要があります。

インストールをテストする手順は次のとおりです。

1. Oracle Application Server の「ようこそ」ページを表示します (<http://hostname:7777>)。
2. 「デモ」タブをクリックします。
3. 「Business Intelligence and Forms」リンクをクリックします。
4. 「Forms Services」または「Reports Services」リンクをクリックして、テスト・フォームまたはテスト・レポートを実行します。

7.3 バックアップとリカバリ

インストールの後にバックアップとリカバリ計画を立案し、実施しておくことをお薦めします。詳細は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。

7.4 SSL

デフォルトでは、ほとんどのコンポーネントに SSL が設定されていません。コンポーネントで SSL を有効にするには、コンポーネントごとのガイドを参照してください。たとえば、Oracle HTTP Server で SSL を有効にするには、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』を参照してください。

7.5 NLS_LANG 環境変数

NLS_LANG 環境変数の値を調べて、環境に適した値であることを確認します。環境変数の詳細および環境変数を設定するファイルの一覧は、『Oracle Application Server 10g グローバリゼーション・ガイド』を参照してください。ここに記載されているファイルでは、NLS_LANG 環境変数の値を編集する必要が生じることもあります。

7.6 Forms および Reports アプリケーションの配置

表 7-1 に、インストール後に Forms および Reports アプリケーションを構成および配置する方法が説明されているガイドを示します。

表 7-1 Forms および Reports アプリケーションの配置

コンポーネント	ガイド
Oracle Application Server Reports Services	『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』
Oracle Application Server Forms Services	『Oracle Application Server Forms Services 利用ガイド』

A

トラブルシューティング

この付録では、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services をインストールする際のトラブルシューティング方法について説明します。次のトピックで構成されています。

- [第 A.1 項「要件の確認」](#)
- [第 A.2 項「インストール時にエラーが発生した場合の対処方法」](#)
- [第 A.3 項「Configuration Assistant のトラブルシューティング」](#)
- [第 A.4 項「Oracle Application Server 10g \(9.0.4\) Forms and Reports Services の Configuration Assistant の説明」](#)

A.1 要件の確認

この付録のトラブルシューティングの手順を実行する前に次の情報を確認してください。

- コンピュータが第5章「要件」に記載された要件を満たしていることを確認します。

リリース・ノートの確認

- Forms/Reports Services をインストールする前に、Oracle Application Server 10g のリリース・ノートをお読みください。リリース・ノートは、プラットフォームごとのドキュメントとともに発行されています。最新のリリース・ノートは、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) の次の Web サイトから入手できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/products/as10g/index.html>

- Oracle Application Server 10g Forms and Reports Services のリリース・ノートをお読みください。Oracle Forms Services、Oracle Forms Developer、Oracle Reports Services および Oracle Reports Developer 用のリリース・ノートです。さらに、Oracle Application Server 10g Forms and Reports Services のリリース・ノートには、このインストール・タイプで使用可能な機能についての情報があります。

A.2 インストール時にエラーが発生した場合の対処方法

Forms/Reports Services のインストール時にエラーが発生した場合は、次のように対処します。

- インストール画面に誤った情報を入力した場合は、「戻る」を必要な回数だけクリックしてその画面に戻ります。
- コンポーネントのログ・ファイルにアクセスする場合にのみ、インストーラを終了します。%ORACLE_HOME%\cfgtoollogs ディレクトリにあるログ・ファイルは、インストーラの使用中にはアクセスできません。
- インストーラがファイルのコピーやリンクを実行しているときにエラーが発生した場合は、次の作業を行います。

- エラーを書き留め、次のインストール・ログで原因を調べます。

```
* inventory_location\logs\installActionstimestamp.log  
* inventory_location\logs\oraInstalltimestamp.err  
* inventory_location\logs\oraInstalltimestamp.out
```

デフォルトの *inventory_location* は、次の場所にあります。

C:\Program Files\Oracle\Inventory

2. 付録 B 「インストールの削除と再インストール」の手順に従って、エラーが発生したインストールを削除します。
3. エラーが発生した箇所を修正します。
4. インストールを再開します。

A.3 Configuration Assistant のトラブルシューティング

Configuration Assistant の実行中に発生したインストール・エラーをトラブルシューティングするには、次の作業を行います。

- 第 A.2 項「インストール時にエラーが発生した場合の対処方法」に記載されているインストール・ログ・ファイルを確認します。
- Forms/Reports Services の Configuration Assistant では、%ORACLE_HOME%\cfgtoollogs ディレクトリにある Configuration Assistant のログ・ファイルを確認します。第 A.4 項「Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の Configuration Assistant の説明」には、その他の Configuration Assistant のログ・ファイルの場所も記載されています。エラーが発生した箇所を修正します。
- 「Fatal Error. Reinstall」というメッセージが表示された場合は、ログ・ファイルを分析して問題の原因を調べます。詳細は、第 A.3.3 項「致命的エラー」を参照してください。

A.3.1 Configuration Assistant のエラー

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の Configuration Assistant のエラーは、インストール画面の最下部に表示されます。また、Forms/Reports Services の Configuration Assistant のインターフェースに、補足情報が表示されることもあります。Configuration Assistant の実行ステータスは、その結果によって識別できます。結果コードは次のとおりです。

ステータス	結果コード
Configuration Assistant が成功しました。	0
Configuration Assistant が失敗しました。	1
Configuration Assistant が取り消されました。	-1

この結果コードは、次のログ・ファイルに書き込まれます。

C:\Program Files\Oracle\Inventory\logs\installActionstimestamp.log

A.3.2 コンポーネントの構成と起動時のエラー

インストール時に「Configuration Assistant」画面が表示されている間は、Configuration Assistant が実行されています。Configuration Assistant にエラーが発生した際に問題を修正する手順は次のとおりです。

1. この Forms/Reports Services のインスタンスのインストール・ログ・ファイルを確認します。
2. %ORACLE_HOME%\cfgtoollogs ディレクトリにある Configuration Assistant ごとのログ・ファイルを確認します。デフォルトのログ・ファイルの場所は、[第 A.4 項「Oracle Application Server 10g \(9.0.4\) Forms and Reports Services の Configuration Assistant の説明」](#) に記載されています。
3. Configuration Assistant についての説明をお読みください。これは、[第 A.4 項「Oracle Application Server 10g \(9.0.4\) Forms and Reports Services の Configuration Assistant の説明」](#) に記載されています。
 - a. エラーが発生した Configuration Assistant に依存コンポーネントがある場合は、その依存コンポーネントを実行しなおします。依存コンポーネントが正常に実行されても、再度実行する必要があります。
 - b. エラーが発生した Configuration Assistant をもう一度実行します。インストーラを使用している場合は、Configuration Assistant を選択し、「再試行」をクリックします。「再試行」をクリックしても Configuration Assistant に再度エラーが発生した場合は、ロック・エントリを削除してからもう一度 Configuration Assistant を実行します。
 - c. オプションの Configuration Assistant にエラーが発生し、それに依存コンポーネントが含まれていない場合は、残りの Configuration Assistant を実行します。取り消されたオプションの Configuration Assistant の選択を解除し、次にリストされている Configuration Assistant を選択して、「再試行」をクリックします。
 - d. コマンドラインから Configuration Assistant の実行コマンドを実行した後にエラーが発生した場合は、Configuration Assistant の実行コマンドをもう一度実行します。エラーが発生した Configuration Assistant を再実行する場合は、%ORACLE_HOME%\cfgtoollogs ディレクトリにある生成済の configToolCommands スクリプト・ファイルを使用できます。configToolCommands スクリプトは、インストーラを終了した後に生成されます。Forms/Reports Services のサイレント・インストールまたは非対話型インストールでは、configToolCommands スクリプトは、Configuration Assistant にエラーが発生した直後に生成されます。

生成済スクリプトを使用する前に、次の環境変数を設定する必要があります。

- ORACLE_HOME パスに ORACLE_HOME 環境変数を設定します。
- PATH 環境変数に、%ORACLE_HOME%\lib と %ORACLE_HOME%\network\lib を追加します。
- DCM プラグインを EM に登録の Configuration Assistant の場合にのみ、PERL5LIB 環境変数を %ORACLE_HOME%\perl\lib\5.6.1 ディレクトリに設定します。

注意： Configuration Assistant の説明に初期タスクに関する項が含まれる場合は、Configuration Assistant を実行する前に、そのタスクを実行する必要があります。

A.3.3 致命的エラー

Configuration Assistant のエラーには、致命的エラーもあります。致命的エラーの場合は、問題を修正して操作を続行してもリカバリできません。そのため、現行のインストールを削除して、Forms/Reports Services を再インストールする必要があります。リカバリの手順は次のとおりです。

1. [第 B.1 項「10g \(9.0.4\) インスタンスの削除](#)」に記載された手順に従って、エラーが発生したインストールを削除します。
2. 致命的エラーの原因を修正します。
3. Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services を再インストールします。
4. 致命的エラーが再度発生する場合は、[第 B.2 項「すべての Oracle 製品の手動による削除](#)」の手順に従って、コンピュータからすべての Oracle インストールを削除する必要があります。

A.3.4 OC4J Instance Configuration Assistant のエラー

OC4J Instance Configuration Assistant にエラーが発生し、次のようなメッセージが表示される場合があります。

```
Adding dependent libraries for application 'portal'...done.
Deploying application 'oraudrepl' to OC4J instance 'OC4J_Portal'...
ERROR: Caught exception during deploy.
java.rmi.RemoteException: deploy failed!: ; nested exception is:
oracle.oc4j.admin.internal.DeployerException: User specified for
application-client uddirepl, 'uddi_replicator' not found
at com.evermind.server.rmi.RMIConection.
EXCEPTION_ORIGINATES_FROM_THE_REMOTE_SERVER(RMIConection.java:1520)
... lines omitted ...
```

このエラー・メッセージは、9.2.0.x から 10g (9.0.4) にアップグレードされた Oracle Internet Directory ですべてのアップグレード手順が完了していないと、中間層をインストールする際に表示されます。Oracle Internet Directory 9.2.0.x を 10g (9.0.4) にアップグレードするときには、Oracle Application Server 10g のアップグレード・ガイドの手順に従って実行しているかどうかを確認します。この手順は、「Identity Management サービスのアップグレード」に記載されています。

A.4 Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の Configuration Assistant の説明

表 A-1 に、Forms/Reports Services の Configuration Assistant をアルファベット順で示します。各インストールでは、インストール・タイプと選択した構成オプションに応じて、異なる Configuration Assistant を使用します。

表 A-1 Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の Configuration Assistant

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
Application Server Control Configuration Assistant	Application Server Control Configuration Assistant は、なし Oracle 管理エージェントと Application Server Control を起動し、Oracle Enterprise Manager Application Server Control を使用してアプリケーションを配置する。	なし
BC4J Configuration Assistant	BC4J Configuration Assistant は、BC4J と Oracle Enterprise Manager Application Server Control を統合する。 この Configuration Assistant には、%ORACLE_HOME%¥lib¥emConfigInstall.jar ファイルが必要。	なし

表 A-1 Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の Configuration Assistant (続き)

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
DCM Repository Backup Assistant	DCM Repository Backup Assistant は、DCM リポジトリのバックアップを可能にする。	なし
Forms Configuration Assistant	Forms Configuration Assistant は Oracle Application Server Forms Services サーバーを構成し、Oracle Application Server Forms Services を Oracle Enterprise Manager Application Server Control と統合する。	ORACLE_HOME\forms90\config\formsConfig.log
HTTP Server Configuration Assistant	HTTP Server Configuration Assistant は Oracle HTTP Server を構成し、それを Oracle Enterprise Manager Application Server Control に登録する。	ORACLE_HOME\Apache\Apache\httpd.log
Java Security Configuration Assistant	Java Security Configuration Assistant はデフォルトのパスワードを変更し、JAAS セキュリティの新規パスワードの設定および再割当てを行う。	ORACLE_HOME\cfgtoollogs\jaznca.log
OC4J Configuration Assistant	<p>OC4J Configuration Assistant は、OC4J を Oracle Enterprise Manager Application Server Control と統合する。Oracle Enterprise Manager Application Server Control の API を使用して次の手順を実行する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ targets.xml ファイルにエントリを追加する。 ■ iasadmin.properties ファイルにエントリを追加する。 <p>この Configuration Assistant は、deploy.ini ファイルに依存する。</p>	なし
OC4J Instance Configuration Assistant	OC4J Instance Configuration Assistant は、デプロイされた Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services アプリケーションに OC4J インスタンスを構成する。	なし
OPMN Configuration Assistant	OPMN Configuration Assistant は、OPMN と OPMN の管理対象プロセスを起動する。	ORACLE_HOME\opmn\logs\opmn.log
OPMN Configuration Assistant - Oracle HTTP Server の起動	OPMN を使用して Oracle HTTP Server を起動する。	ORACLE_HOME\opmn\logs\HTTP_Server.log
OPMN Configuration Assistant - DAS インスタンスの起動	OPMN を使用して DAS インスタンスを起動する。	ORACLE_HOME\opmn\logs\opmn.log

表 A-1 Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の Configuration Assistant (続き)

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
Oracle Net Configuration Assistant	Oracle Net Configuration Assistant はデータベース・リスナーを構成し、中間層の Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services のインスタンスを構成して、デフォルトで LDAP ネーミングを使用する。	ORACLE_HOME\$\oraInventory\$\logs\$\installActions<time.stamp>.log
OracleAS Instance Configuration Assistant	OracleAS Instance Configuration Assistant は、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services のインスタンス名を %ORACLE_HOME%\config\targets2add.xml ファイルに追加する。	なし
DCM プラグインを EM に登録の Configuration Assistant	DCM プラグインを Enterprise Manager に登録する。	なし
Reports Configuration Assistant	Reports Configuration Assistant は Oracle Application Server Reports Services サーバーを構成し、Oracle Application Server Reports Services を Oracle Enterprise Manager Application Server Control と統合する。	ORACLE_HOME\$\reports\$\config\$\reportsConfig.log
Web Cache Configuration Assistant	Web Cache Configuration Assistant は OracleAS Web Cache を構成し、それを Oracle Enterprise Manager Application Server Control に登録する。	ORACLE_HOME\$\webcache\$\log\$\log.xml

B

インストールの削除と再インストール

この付録では、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services インストールの削除および再インストール・プロセスについて説明します。

注意： Forms/Reports Services は、状況に応じて様々な方法で起動と停止を行える柔軟性のある製品です。製品を削除または再インストールする前に、関連するすべてのサービスまたはプロセスを停止する方法について、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。

この付録は、次の項で構成されています。

- [第 B.1 項 「10g \(9.0.4\) インスタンスの削除」](#)
- [第 B.2 項 「すべての Oracle 製品の手動による削除」](#)
- [第 B.3 項 「再インストール」](#)

B.1 10g (9.0.4) インスタンスの削除

Forms/Reports Services のインスタンスを削除するには、表 B-1 に記載されたアイテムをクリーンアップする必要があります。

これらのアイテムを削除する方法は、この付録で後述するインストール手順に記載されています。また、手動でアイテムをクリーンアップする方法についても詳しく説明しています。

表 B-1 削除するアイテム

クリーンアップするアイテム	使用するツール
Oracle ホーム・ディレクトリのファイル	インストーラ インストーラですべてのファイルが削除されなかった場合は、 <code>del</code> コマンドで残りのファイルを削除できる。
インベントリ・ディレクトリ内の削除されたインスタンスのエントリ	インストーラ
「ファーム」ページのインスタンス名	インストーラ
Windows レジストリ内の削除されたインスタンスのエントリ	インストーラ

インストーラでは、コンポーネントを個別に指定して削除することはできません。

B.2 すべての Oracle 製品の手動による削除

コンピュータからすべての Oracle 製品を削除する手順は次のとおりです。

注意： この手順を実行すると、コンピュータからすべての Oracle コンポーネント、サービスおよびレジストリ・エントリが削除されます。レジストリ・エントリを削除する際には十分に注意してください。間違ったエントリを削除すると、コンピュータが機能しなくなる場合があります。

- レジストリ・キーを削除します。
 - 「スタート」→「ファイル名を指定して実行」を選択します。「`regedit`」と入力し、「OK」をクリックします。これで、レジストリエディタが表示されます。
 - レジストリから次のフォルダを削除します。フォルダを削除するには、フォルダを選択し、メニューから「編集」→「削除」を選択します。
 - 「`HKEY_LOCAL_MACHINE`」→「`SOFTWARE`」→「`ORACLE`」
 - 「`HKEY_LOCAL_MACHINE`」→「`SYSTEM`」→「`CurrentControlSet`」→「`Services`」→「`ORACLE`」

- * 「HKEY_LOCAL_MACHINE」→「SYSTEM」→「ControlSet X」→「Services」→「ORACLE」
X は、ControlSet001 のような数字を示します。
 - * 「HKEY_CURRENT_USER」→「Software」→「ORACLE」
 - * 「HKEY_CLASSES_ROOT」→「ORACLE」
- c. Windows NT の場合は、次のフォルダも削除します。
- * 「HKEY_LOCAL_MACHINE」→「SOFTWARE」→「Apache Group」→「Apache 1.X.X」
「ServerRoot」のパスが既存の Oracle ホームを参照している場合は、「Apache Group」を選択して削除します。
 - * 「HKEY_LOCAL_MACHINE」→「SOFTWARE」→「classes」→「ORACLE」
- d. レジストリ・エディタを終了します。
2. 環境変数を編集または削除します。
- 環境変数を表示する手順は次のとおりです。
- Windows 2000: 「マイ コンピュータ」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。「詳細」タブを選択し、「環境変数」をクリックします。
 - Windows NT: 「マイ コンピュータ」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。「環境」タブを選択します。
- a. 次のシステム変数がある場合は削除します。
- DISCO_JRE
 - DISCO_VBROKER
 - VBROKER_JAVAVM
 - VBROKER_TAG -D
 - WV_GATEWAY_CFG
- b. Path システム変数を変更して、既存の Oracle ホーム・パスへの参照をすべて削除します。
- Windows 2000 の場合
Path システム変数を選択します。「編集」ボタンをクリックし、「変数値」フィールドのパスを変更します。
 - Windows NT の場合
Path システム変数を選択します。「値」フィールドのパスを変更します。

たとえば、次のように Oracle によって変更された Path システム変数があります。

```
C:\ias904\iSuites\BIN;C:\ias904\806\bin;C:\ias904\iSuites\Apache\Perl\5.00503\bin\mswin32-x86;C:\ProgramFiles\Oracle\jre\1.1.7\bin;C:\WINNT\system32;C:\WINNT\System32\Wbem;C:\ias904\806\vbroker\bin;C:\ias904\806\jdk\bin
```

Oracle ホームの参照を削除した後の Path システム変数は次のようにになります。

```
C:\WINNT\system32;C:\WINNT;C:\WINNT\System32\Wbem
```

3. 「OK」をクリックします。
4. Oracle プログラム・フォルダを削除します。

Windows 2000 の場合

- 「スタート」→「プログラム」をクリックします。Oracle フォルダを削除するには、フォルダを右クリックして「削除」を選択します。

Windows NT の場合

- a. 「スタート」→「プログラム」→「Windows NT エクスプローラ」をクリックします。
- b. インストール先ハード・ドライブで、WINNT\Profiles\All Users\Start Menu\Programs に移動します。
- c. Oracle の各ディレクトリを右クリックして削除します。
- d. WINNT\Profiles\All Users\Start Menu\Programs\Startup に移動します。
- e. Oracle の各アイコンを右クリックして削除します。

5. Oracle ユーザーを削除します。

Windows 2000 の場合

- a. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「管理ツール」→「コンピュータの管理」→「ローカルユーザーとローカル グループ」→「ユーザー」をクリックします。「ユーザー」フォルダを開き、Oracle アプリケーション・インストールのユーザー名を削除します。
- b. 「管理ツール」を終了します。
- c. デスクトップで「マイ コンピュータ」をダブルクリックします。ハード・ドライブにある「Documents and Settings」ディレクトリから Oracle ユーザー・エントリを削除します。
- d. 「マイ コンピュータ」を終了します。

Windows NT の場合

- a. 「スタート」→「プログラム」→「管理ツール」→「ユーザー マネージャ」をクリックします。「ユーザー名」列で、Oracle アプリケーション・インストールのユーザー名を選択します。「ユーザー」メニューから「削除」を選択します。
 - b. 「ユーザー マネージャ」を終了します。
 - c. 「スタート」→「プログラム」→「Windows NT エクスプローラ」をクリックします。インストール先ハード・ドライブの WINNT¥Profiles に移動し、Oracle アプリケーション・インストールのユーザーを削除します。
 - d. 「Windows NT エクスプローラ」を終了します。
6. Windows NT では、TEMP ディレクトリにある Oracle フォルダを削除します。
 - a. 「スタート」→「プログラム」→「Windows NT エクスプローラ」をクリックします。
 - b. インストール先ハード・ドライブの TEMP ディレクトリで、Install Guide ディレクトリと OraInstall ディレクトリを削除します。
 - c. 「Windows NT エクスプローラ」を終了します。
7. コンピュータを再起動します。
8. コンピュータが再起動した後で、ハード・ドライブから既存の Oracle ホーム・ディレクトリを削除します。
「スタート」→「プログラム」→「Windows NT エクスプローラ」をクリックします。インストール先ハード・ドライブに表示される Oracle ホーム・ディレクトリを削除します。
次に例を示します。
C:¥Oracle¥*、C:¥Program Files¥Oracle¥*
9. 「Windows NT エクスプローラ」を終了します。
10. コンピュータを再起動します。

B.3 再インストール

Forms/Reports Services のインスタンスがすでにインストールされているディレクトリに、Forms/Reports Services のインスタンスを再インストールすることはできません。Forms/Reports Services を同じディレクトリに再インストールするには、そのインスタンスをいったん削除してからインストールする必要があります。

C

コンポーネントの URL

表 C-1 に、インストール後にコンポーネントへのアクセスに使用する URL およびログイン ID を示します。

表内の URL はデフォルトのポートです。使用する環境のコンポーネントによっては、異なるポートが使用される場合があります。コンポーネントごとのポート番号は、%ORACLE_HOME%\install\portlist.ini ファイルで確認できます。

表 C-1 コンポーネントの URL

コンポーネント	URL	portlist.ini のエントリ	ログインおよびパスワード
OracleAS の「ようこそ」ページ	http://host:80	Oracle HTTP Server ポートまたは Web Cache リスニング・ ポート	なし
Oracle HTTP Server	http://host:80 (Web Cache なし) http://host:80 (Web Cache あり)	Oracle HTTP Server リスニング・ポート	なし
Oracle Application Server Forms Services	http://host:80/forms90/f90servlet	Web Cache リスニング・ポート	なし
Oracle Application Server Reports Services	http://host:80/reports/rw servlet/gets erverinfo	Web Cache リスニング・ポート	orcladmin パスワード: orcladmin の デフォルトのパスワードは、 インストール時に指定した ias_admin のパスワードと 同じ。
Oracle Enterprise Manager Application Server Control	http://host:1810	Application Server Control ポート	ias_admin パスワード: インストール 時に指定した ias_admin のパスワードを使用する。

D

Java Access Bridge のインストール

この付録では、Java Access Bridge のインストール方法について説明します。Java Access Bridge を使用すると、Oracle コンポーネントでスクリーン・リーダーを利用できます。

この付録は、次の項で構成されています。

- [第 D.1 項「概要」](#)
- [第 D.2 項「JRE 1.4.2 のセットアップ」](#)
- [第 D.3 項「Oracle コンポーネントのセットアップ」](#)

D.1 概要

Java Access Bridge をインストールすると、JAWS スクリーン・リーダーなどのユーザー補助機能を使用して、Windows プラットフォームで実行される Java アプリケーションを読み取ることができます。ユーザー補助機能では、Oracle Universal Installer や Oracle Enterprise Manager Application Server ControlなどのJavaベースのインターフェースを読み取ることができます。

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Forms and Reports Services の CD-ROM には、インストール時に Oracle Universal Installer によって使用される Java Runtime Environment (JRE) 1.4.1 が収録されています。JRE を使用すると、インストール時に Java Access Bridge が利用できます。Oracle コンポーネントをインストールした後で Java Access Bridge をインストールおよび構成する方法については、[D-2 ページの第 D.3 項「Oracle コンポーネントのセットアップ」](#) を参照してください。

D.2 JRE 1.4.2 のセットアップ

JRE 1.4.2 で Java Access Bridge をセットアップするには、Oracle インストール・メディアにある次のバッチ・ファイルを実行します。

`DRIVE LETTER:¥install¥access_setup.bat`

バッチ・ファイルを実行した後で、ユーザー補助プログラムを再起動します。

D.3 Oracle コンポーネントのセットアップ

この項では、Oracle コンポーネントをインストールした後に、Java Access Bridge for Windows をインストールおよび構成する方法について説明します。この項は、次のトピックで構成されています。

- [第 D.3.1 項「Java Access Bridge のインストール」](#)
- [第 D.3.2 項「Java Access Bridge を使用するための Oracle コンポーネントの構成」](#)

D.3.1 Java Access Bridge のインストール

Java Access Bridge をインストールする手順は次のとおりです。

1. Oracle インストール・メディアで、AccessBridge ディレクトリに移動します。
2. `accessbridge-1_0_4.zip` ファイルを選択し、そのファイルを Access Bridge のインストール先システムで解凍します。次に例を示します。
`c:\AccessBridge-1.0.4`
3. **表 D-1** の Java Access Bridge ファイルを、Oracle コンポーネントが使用する JRE 1.4.2 ディレクトリにコピーします。デフォルトでは、Oracle コンポーネントが使用する JRE は次のディレクトリにインストールされています。

`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\jre\1.4.2`

表 D-1 に、ハード・ドライブ上の Java Access Bridge ディレクトリから Oracle コンポーネントが使用する JRE ディレクトリにコピーする必要のあるファイルを示します。

表 D-1 JRE ディレクトリにコピーするファイル

コピー元	コピー先
<code>\AccessBridge-1_0_4\installer\installerFiles\jaccess-1_4.jar</code>	<code>ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\jre\1.4.2\lib\ext</code>
<code>\AccessBridge-1_0_4\installer\installerFiles\jaccess-bridge.jar</code>	<code>ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\jre\1.4.2\lib\ext</code>
<code>\AccessBridge-1_0_4\installer\installerFiles\JavaAccessBridge.dll</code>	<code>windows_directory\SYSTEM32</code>
<code>\AccessBridge-1_0_4\installer\installerFiles\WindowsAccessBridge.dll</code>	<code>windows_directory\SYSTEM32</code>
<code>\AccessBridge-1_0_4\installer\installerFiles\JAWTAccessBridge.dll</code>	<code>windows_directory\SYSTEM32</code>
<code>\AccessBridge-1_0_4\installer\installerFiles\accessibility.properties</code>	<code>ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\jre\1.4.2\lib</code>

4. `jaccess-1_4.jar` ファイルの名前（コピー先の `ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\jre\1.4.2\lib\ext` にある）を `jaccess.jar` に変更します。
5. インストールに成功したら、次のディレクトリにある Java Access Bridge ドキュメントにアクセスできます。

`c:\AccessBridge-1.0.4\doc`

D.3.2 Java Access Bridge を使用するための Oracle コンポーネントの構成

インストールが完了した後は、Access Bridge を使用できるように Oracle コンポーネントを構成します。システム変数 ORACLE_OEM_CLASSPATH で、インストールした Java Access Bridge ファイルが参照されるように設定します。

D.3.2.1 Windows NT の構成

Windows NT で Access Bridge を使用できるように Oracle コンポーネントを構成する手順は次のとおりです。

1. 「スタート」 → 「設定」 → 「コントロールパネル」 → 「システム」を選択します。Windows の「コントロールパネル」の「システム」が表示されます。
2. 「環境」タブを選択します。
3. 「システム環境変数」リストから変数を選択します。
4. 「変数」フィールドに、ORACLE_OEM_CLASSPATH を入力します。
5. 「値」フィールドに、jaccess.jar と access-bridge.jar へのフルパスを入力します。

2つのパスは、セミコロンを使用して区切ります。引用符やスペースは使用しないでください。たとえば、JRE 1.4.2 をデフォルトのインストール先にインストールする場合は、次の設定になります。

```
c:\oracle\product\10.1.0\Db_
1\jre\1.4.2\lib\ext\jaccess.jar;c:\oracle\product\10.1.0\Db_
1\jre\1.4.2\lib\ext\access-bridge.jar
```

6. 「設定」をクリックします。
7. 「OK」をクリックします。

D.3.2.2 Windows 2000、Windows XP、Windows Server 2003 の構成

Windows 2000、Windows XP または Windows Server 2003 で Access Bridge を使用できるように Oracle コンポーネントを構成する手順は次のとおりです。

1. 「スタート」 → 「設定」 → 「コントロールパネル」 → 「システム」を選択します。Windows の「コントロールパネル」の「システム」が表示されます。
2. 「詳細」タブを選択します。
3. 「環境変数」ボタンをクリックします。
4. 「システム環境変数」リストの下の「新規」ボタンをクリックします。「新しいシステム変数」ダイアログが表示されます。
5. 「変数名」フィールドに、ORACLE_OEM_CLASSPATH と入力します。

6. 「変数値」 フィールドに、 `jaccess.jar` と `access-bridge.jar` へのフルパスを入力します。

2 つのパスは、セミコロンを使用して区切ります。引用符やスペースは使用しないでください。たとえば、JRE 1.4.2 をデフォルトのインストール先にインストールする場合は、次の設定になります。

```
c:\oracle\product\10.1.0\Db_
1\jre\1.4.2\lib\ext\jaccess.jar;c:\oracle\product\10.1.0\Db_
1\jre\1.4.2\lib\ext\access-bridge.jar
```

7. 「OK」 をクリックします。

索引

A

Administrators グループ, 5-7
Application Server Control, 1-3
「Oracle Enterprise Manager Application Server Control」を参照

C

CD-ROM
　　ハード・ドライブへのコピー, 5-26
CD-ROM/DVD からハード・ドライブへのコピー, 5-26
CLASSPATH 環境変数, 5-9
Configuration Assistant, A-3
　　依存コンポーネント, A-4
　　エラー・コード, A-3
　　説明, A-6
　　トラブルシューティング, A-4
Configuration Assistant の機能強化, 3-15
CPU 要件, 5-3

D

DHCP, 5-3
Distributed Configuration Management, 1-4
DVD
　　形式, 6-5
　　ハード・ドライブへのコピー, 5-26

G

Grid 環境, 1-1

H

httpd.conf ファイル, 3-7

I

ias_admin ユーザー, 6-4
　　パスワード, 3-13, 6-4
IP
　　DHCP, 5-3
　　要件, 5-3

J

Java Access Bridge
　　JRE 1.4.2, D-2
　　インストール, D-3
　　構成, D-4

N

NLS_LANG 環境変数, 7-3

O

OC4J, 1-3
OC4J Instance Configuration Assistant のエラー, A-6
Oracle Application Server Containers for J2EE, 1-3
Oracle Application Server Forms and Reports Services
　　概要, 1-1
　　機能, 1-2
Oracle Application Server Forms Services, 1-2
Oracle Application Server Reports Services, 1-2
Oracle Application Server Web Cache, 1-3
Oracle Enterprise Manager, 1-3

Oracle Enterprise Manager Application Server
Control, 3-14
Oracle Enterprise Manager Web サイト, 3-14
Oracle HTTP Server, 1-3
 静的ポートの構成, 3-7
Oracle Management Server, 3-14
Oracle Management Service, 3-14
Oracle Process Manager and Notification Server, 1-4
Oracle Universal Installer
 起動, 6-5
 前提条件チェック, 5-32
 ファイルの保存先, 6-5
 ログ・ファイル, A-2
Oracle Universal Installer の起動, 6-5
ORACLE_HOME 環境変数, 5-9
ORACLE_SID 環境変数, 5-9
OracleAS Web Cache
 静的ポートの構成, 3-7
Oracle ホーム・ディレクトリ, 6-2

P

PATH 環境変数, 5-9
pcAnywhere, 5-30
portlist.ini ファイル, 3-5

R

RAM 要件, 5-3

S

setup.exe コマンド
 CD-ROM, 6-5
 DVD, 6-5
 -executeSysPrereqs パラメータ, 5-2
SSL
 インストール後の構成, 7-3
staticports.ini ファイル, 3-3
 形式, 3-4
 作成, 3-4

T

TEMP 環境変数, 5-9
TEMP ディレクトリ, 5-9, 6-5
 必要な容量, 5-3

U

URL, コンポーネント, C-1

V

VNC, 5-30

W

Windows システム・ファイル (wsf.exe), 5-5
wsf.exe, 5-5

あ

インスタンス名, 6-3
 使用される仕組み, 6-3
 有効な文字, 6-3
インストーラ
 新機能, 3-1
 「Oracle Universal Installer」を参照
インストール後, 7-1
インストール手順, 要約, 2-1
インストールの削除, B-1
 すべての Oracle 製品の削除, B-2
インベントリ・ディレクトリ, 6-5
エラー, インストール, A-2
エラー・コード, Configuration Assistant, A-3
オペレーティング・システム, サポート, 5-2
オペレーティング・システム・ユーザー, 5-7
 Administrators グループ, 5-7

か

カスタム・ポート
 「静的ポート」を参照
仮想メモリー (ページファイル・サイズ) の要件
 , 5-4
環境変数, 5-8
 CLASSPATH, 5-9
 NLS_LANG, 7-3
 ORACLE_HOME, 5-9
 ORACLE_SID, 5-9
 PATH, 5-9
 TEMP, 5-9
 設定, 5-8
 グループ (オペレーティング・システム)

Administrators グループ, 5-7
言語, 追加インストール, 6-2
コンポーネント
 URL, C-1
 カスタム・ポート番号を割り当てる方法, 3-3
互換性
 互換性マトリックス, 4-2
 リリース 9.0.2/9.0.3, 4-2

さ

新機能, インストーラ, 3-1
制限事項, 1-2
静的ポート, 3-3
 Oracle HTTP Server, 3-7, 3-8
 OracleAS Web Cache, 3-7
 機能しない, 3-6
 例, 3-9
静的ポート番号, 3-3
前提条件チェック, 5-32

た

他の言語, 6-2
他の言語のインストール, 6-2
致命的エラー, A-5
手順, 要約, 2-1
テスト, 7-2
ディスク容量の要件, 5-3
デフォルトのポート番号, 3-2
トラブルシューティング, A-1, A-4
 Configuration Assistant, A-3
 インストール・エラー, A-2
 致命的エラー, A-5
 要件の確認, A-2

な

名前, インスタンス
 「インスタンス名」を参照
ネットワーク・カード, 複数, 5-11
ネットワーク関連のトピック, 5-9
 ハード・ドライブからのインストール, 5-26
 複数のネットワーク・カード, 5-11
 リモート CD-ROM/DVD ドライブからのインストール, 5-28
 リモート・インストール, 5-30

ネットワーク要件, 5-3

は

ハード・ドライブからのインストール, 5-26
配置, 7-3
バックアップとリカバリ
 インストール後, 7-3
パスワード
 ias_admin ユーザー, 3-13, 6-4
プラウザ要件, 5-4
プロセッサ, 5-3
ページファイル・サイズ (仮想メモリー) の要件
 , 5-4
ポート, 3-2
 静的ポート, 3-3
 デフォルトのポート番号, 3-2
ポート番号
 静的, 3-3

ま

メモリー要件, 5-3
削減, 5-5
モニター要件, 5-4

や

ユーザー (オペレーティング・システム)
 「オペレーティング・システム・ユーザー」を参照
要件, 5-4
 IP, 5-3
 TEMP ディレクトリの容量, 5-3
 オペレーティング・システムのバージョン, 5-2
 仮想メモリー (ページファイル・サイズ), 5-4
 環境変数, 5-8
 ディスク容量, 5-3
 ネットワーク, 5-3
 プラウザ, 5-4
 プロセッサ, 5-3
 ページファイル・サイズ (仮想メモリー), 5-4
 メモリー, 5-3
要約, インストール手順, 2-1

ら

リモート・インストール, 5-28, 5-30

リモート・コントロール・ソフトウェア, 5-30

リリース 9.0.2/9.0.3

互換性, 4-2

ログ・ファイル, A-2